第三百五十七條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヿヲ得

但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヿヲ得

第三百五十八條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條　被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條　被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條　被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

十八年第二號布告卷二（第百八十三ノ廿三項）

第三百六十二條　會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルヿナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條　前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スヿヲ得

第三百六十四條　被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ」

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第三百六十五條　檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一　檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二　被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四　檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日内ニ之ヲ爲スヿヲ得
闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヿヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條　公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條　第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條　控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四章　重罪公判

第三百七十二條　重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス
一　豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二　控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ
控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ
始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條　公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ
一　被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模樣
二　被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地
三　豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑
四　罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條　公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條　重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヿヲ裁判所長ニ請求スルヲ得
裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以

テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得

第三百七十七條　書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條　重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且ツ辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヿヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヿヲ得ス

第三百七十九條　辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ヲ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條　書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辯護人ヲ選任スルニ

十五年第一號布告參看〔第百八十三ノ十二項〕

付キ其式ヲ履行シタルヿヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條　辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヿアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヿヲ得ス

第三百八十二條　辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヿヲ得又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルヿヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條　檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條　前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヿヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキヿヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百八十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條　裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス可キヿヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條　裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スヿヲ得

第三百八十八條　裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條　書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼出ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條　裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條　裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サヽル可カラス

第三百九十二條　裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條　裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條　證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヿ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヿヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第三百九十五條　裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヿヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヿヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條　裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヿヲ言渡ス可シ

第三百九十七條　檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヿヲ得

裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條　辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヿヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條　前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヿヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヿヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條　被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免許ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條　辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條　檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百四條　闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヿヲ得

第四百五條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條　闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヿヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百七條　闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條　故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條　闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障

ノ申立ヲ為ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ為ス可シ

第五編　大審院ノ職務

第一章　上告

第四百十條　檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ為スヿヲ得

一法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四法律ニ於テ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無效ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ為サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヿヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ為シタル時

八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ為メ定メタル規則ニ背キタルヿ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ為スヿヲ得ス

第四百十二條　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ為スヿヲ得

第四百十三條　上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ為スヿヲ得」大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ為スヿヲ得

第四百十四條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條　豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條　上告ヲ為サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條　上告申立人ハ其申立ヲ為シタルヨリ五日內ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ

差出ス可シ
書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條　對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條　檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ
私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條　書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ
檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ
檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヿヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條　上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヿヲ得
重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條　院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ
專任判事ハ一切ノ書類ヲ撿閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

第四百二十三條　上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヿヲ得
專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條　書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條　開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ
檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ
私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條　上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サヽル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條　大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條　大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條　擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヿニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヿナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條　豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサヽル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條　豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條　大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條　大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其罪ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條　法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコヲ得

第四百三十五條　法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期內ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條　左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルコヲ得

一　大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二　訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サヽル時

三　同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條　哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日內ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日內ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限內ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條　大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章　再審ノ訴

第四百三十九條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコヲ得ス

一　人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其塲所ニ在ラサルヿヲ證明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ僞造又ハ錯誤アルヿヲ證明シタル時

第四百四十條　再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

第四百四十二條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條　大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條　大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條　大審院ニ於テ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヿヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル塲合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條　再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ塲合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ掲示公告ス可シ

第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條　通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヿ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヿヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヿヲ得

第四百四十九條　裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之

ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條　大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條　犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十二條　公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條　大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヿナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條　被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヿ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十五條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヿヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第四百五十六條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日內ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第四百五十七條　大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編　裁判執行復權及ヒ特赦

第一章　裁判執行

第四百五十九條　重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條　死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日內ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條　刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條　死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條　裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作リ左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地

二罪名刑名

三再犯

四裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條　既決犯罪表ハ二通ヲ作リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作リ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヿヲ認定ズルヿ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヿヲ得

第四百六十八條　前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條　賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章　復權

第四百七十條　復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條　復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一裁判言渡書ノ謄本

二主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヿヲ證明スル書類

三假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條　検事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所検事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條　検事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條　司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ検閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條　勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所検事長ニ通知シ検事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所検事ニ通知ス可シ」

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條　復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所検事長ニ送致シ検事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所検事ニ送致ス可シ

検事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

治罪法第廿四條參看

同第四十條參看

第三章　特赦

第四百七十七條　特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ検察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルコヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ検察官ヲ經由ス可シ但検察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條　司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條　特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ検察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條　特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ検察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

○治罪法中書類送達以下七項施行方

明治十四年九月二十日
第四拾六號布告

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ內ハ不及其儀候事

○

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ內犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

○

治罪法第七拾三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事

同第七十三條參看

○

同第百壹條參看

治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其擧動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルコヲ得

○

同第百三條參看

治罪法第百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日沒後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸座敷ハ日出前日沒後ニ拘ハラス搜索致シ苦シカラス

○

同第百六十八條及百七十二條參看

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルコヲ得

○

同第二百五條參看

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

○刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルノ手續 明治十四年九月二十日第四拾七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ撿事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

治罪法第五十二條參看

○治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ輕罪裁判ヲ爲スノ手續等 明治十四年十月六日第五拾四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ撿察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

治罪法第七十三條及第七十九條參看

○陪席判事及補充判事ハ其裁判所長又ハ院長ノ指定スル所ニ任ス 明治十四年十月六日第五拾五號布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

治罪法第四十九條參看

○小笠原島違警罪及輕重罪裁判管轄及治罪手續 明治十四年十月七日第五拾六號布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所即チ違警罪裁判所始審裁判所即チ輕罪裁判所ノ權限

治罪法第四十九條參看

治罪法第百廿二條參看

ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○伊豆七島違警罪輕罪裁判管轄及治罪手續　明治十四年十月七日第五拾七號布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解幷ニ刑事ハ違警罪裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○豫審判事ノ勾引セシメタル被告人留置方　明治十四年十月八日第五拾九號布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

○商船内犯罪取扱規則ヲ制定ス　明治十四年十二月十五日第六拾五號布告

商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

右奉　勅旨布告候事

（別紙）

商船内犯罪取扱規則

第一條　何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スヿヲ得

第二條　船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルヿ能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條　船長ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纒メ被告人ト共ニ該船碇船又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐箚ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

○治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時警部檢事ノ職務ヲ代理ス　明治十四年十二月二十八日第七拾壹號布告

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

右奉　勅旨布告候事

○治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及民事擔當人ト稱スル者　明治十四年十二月廿八日第七拾三號布告

治罪法第九十八條參看

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

無能力者

一 未丁年者

二 妻タル者

三 白痴瘋癲人

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人

二 夫タル者

三 白痴瘋癲人ノ保管者

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者

二 夫タル者

三 白痴瘋癲人ノ保管者

四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

右奉 勅旨布告候事

治罪法第三百八十一條參看

○裁判所所屬ノ代言人無之場所ハ辯護人ヲ用ヒサルモ刑ノ言渡ハ無效ノ限ニアラス 明治十五年一月九日 第壹號布告

治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカルヘシト有之候得共其裁判所所屬ノ代言人無之場所ニ於テハ當分ノ內辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無效ノ限リニ在ラス

右奉 勅旨布告候事

治罪法第十九條參看

○治罪法第十九條海上路程猶豫ノ割合 明治十五年二月一日 第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

右奉 勅旨布告候事

治罪法第三十八條參看

○樺戶集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者裁判手續 明治十五年三月三日 第拾六號布告

樺戶集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉 勅旨布告候事

治罪法第六十一條參看

○憲兵將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡査ト同ク司法警察ノ事務ヲ行ハシム 明治十五年五月十三日第貳拾三號布告

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡査ト同シク司法警察ノ事ヲ行ハシム

右奉 勅旨布告候事

治罪法第七十條參看

○札幌根室始審裁判所治罪手續等 明治十五年六月二十日第三拾號布告

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ內治罪ノ手續便宜取計且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ

右奉 勅旨布告候事

十四年第七十八號布告ハ十六年第三十三號布告ヲ以テ廢ス
治罪法第七十條參看

○沖繩縣管內重罪犯處分方及治罪手續 明治十五年七月八日第三拾三號布告

明治十四年十二月第七拾八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處沖繩縣管內重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ內同縣ニ於テ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ長崎控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ

治罪ノ手續ハ便宜ノ取計ヲ爲スコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

治罪法第三十八條參看

○空知集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者裁判及治罪手續 明治十五年八月十二日第四拾壹號布告

空知集治監ノ囚人（假出獄免幽閉ノ者𪜈）罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス、

右奉 勅旨布告候事

治罪法第二百六條參看

○現行犯訊問時間五日內ニ於テスルヿヲ得 明治十五年十一月十三日第五拾三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時內ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ內五日以內ニ於テスルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

治罪法第十七三條參看

○始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク圧其所長ヲ裁判長ト爲スコトヲ得 明治十六年一月十日第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ內始審裁判所長ヲ以テ其裁判長ト爲スコトヲ得

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ從前ノ通タル可シ

右奉 勅旨布告候事

○裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得 明治十六年三月七日第八號布告

治罪法第百四十八條參看

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ內書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

○重罪裁判所管轄ハ始審裁判所管內ヲ以テ一區劃ト定ム　明治十六年九月七日第三拾三號布告

治罪法第七十條參看

明治十四年十二月第七拾八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始審裁判所管內ヲ以テ一區劃ト定メ各其地名ヲ冒シ某重罪裁判所ト名稱ス

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ從前ノ通

右奉　勅旨布告候事

○樺戶空知兩集治監ノ囚人重罪ヲ犯シタル者札幌始審裁判所ニ於テ處分ス　明治十六年十一月十日第三拾八號布告

治罪法第七十條參看

樺戶空知兩集治監ノ囚人（假出獄免幽閉ノ者トモ）罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ內札幌始審裁判所ニ於テ明治十五年六月第三拾號布告ニ準シ處分スヘシ

右奉　勅旨布告候事

○治罪法第八十三條ニ記載シタル事件ヲ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得　明治十六年十二月二十八日第四拾九號布告

治罪法第八十三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

○輕罪ニ係ル控訴規則　明治十八年一月六日第貳號布告

治罪法第三百六十五條以下參看

明治十四年十二月第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ牴觸スル條件ハ當分ノ內施行セス

第一條　控訴ハ治罪法中本按ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本按ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二條　控訴ノ期限內ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三條　被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條　被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキハ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條　治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之

治罪法第四十九條及三百廿一條以下參看

ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

右奉　勅旨布告候事

○違警罪即決例ヲ制定ス　明治十八年九月二十四日第三拾壹號布告

明治十四年九月第四拾四號布告及ヒ同年十二月第八拾號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

右奉　勅旨布告候事

（別紙）

違警罪即決例

第一條　警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條　即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條　即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條　即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齡身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條　正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條　警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條　第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條　科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條　科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條　拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サヽル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條　保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ沒入シテ本刑ニ換フ

第十二條　留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條　留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

右奉　勅旨布告候事

○札幌根室始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク　明治十八年十月二十二日第三拾三號布告

自今札幌根室始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク但治罪ノ手續ハ當分ノ內便宜取計フヘシ

右奉　勅旨布告候事

○普通治罪法陸海軍治罪法交涉ノ件處分法ヲ制定ス　明治十八年五月廿九日第拾貳號布告

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ牴觸スルモノハ當分施行セス

第一條　常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條　軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條　敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ揭クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條　軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條　多衆ノ軍人常人鬪毆殺傷其他疑獄ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條　軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

右奉　勅旨布告候事

○司法官吏ヨリ巡査及兵員ヲ要求使用スルノ手續　明治十四年九月二十日第八拾貳號官省院使廳府縣ヘ達

司法官吏ヨリ巡査及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條　裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡査又ハ憲兵卒ヲ使用スルヿヲ得

但事機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルヿヲ得

治罪法第四十條參看

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ渉ル時ハ直チニ偵察又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヿヲ得

○陸海軍々人東京府下ニ於テ違警罪ヲ犯シタル者處分方 明治十四年九月二十一日 司法省丁第拾三號大審院裁判所ヘ達

陸海軍人東京府下ニ於テ違式詿違ノ罪ヲ犯シタル者處分ノ儀ニ付太政官ヨリ別紙ノ通御達有之候條此旨爲心得相達候事

司法省

（別紙）

陸海軍々人東京府下ニ於テ違式詿違ノ罪ヲ犯シタル者ハ憲兵條例第八條ニ據リ憲兵ニ於テ處分シ其追徵シタル科料ハ憲兵隊長ヨリ其省ヘ交付セシメ候條此旨相達候事

明治十四年九月十五日 太政大臣三條實美

○豫審判事檢證及物件差押ノ事件ニ付巡査同行使用方 明治十四年十月四日 司法省丙第拾五號警視廳府縣（東京府沖繩縣ヲ除ク）ヘ達

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡査ヲ同行シ又ハ所在ノ巡査ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可遂照此旨相達候事

同年司法省丁第廿三號ヲ以テ本件ヲ大審院裁判所ヘ達ス

○大審院裁判所公庭取締ノ爲メ巡査ヲ詰サセ又ハ被告人護送ノ巡査押丁ヲシテ公庭ニ入リ看護セシム 明治十四年十月四日 第八拾六號警視廳府縣（東京府沖繩縣ヲ除ク）ヘ達

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スルタメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡査爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡査或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入リ看護セシムヘシ此旨相達候事

○司法警察上巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシム 明治十四年十月十日 司法省甲第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之候條此旨布達候事

治罪法第六十一條參看

○司法警察上巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムルヲ許ス 明治十四年十月十日 司法省丙第拾三號警視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ不得止場合ニ於テハ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシメ不苦候條此旨相達候事

但代理ヲ命スヘキ巡査ノ姓名ハ豫シメ其地方始審裁判所並違警罪裁判所ヘ通牒致シ置候儀ト心得ヘシ

同年司法省丁第十七號ヲ以テ本文ノ趣ヲ大審院裁判所ヘ達ス

○裁判言渡ノ謄本又ハ拔書ヲ求ムル費用上納方 明治十四年十二月二日 司法省甲第七號布達

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト可心得此旨布達候事

治罪法第三百十五條參看十五年丁第九號ヲ以テ納付方ヲ達ス

○大審院諸裁判所々屬代言人規則ヲ定ム 明治十四年十二月二日 司法省第八號布達

大審院諸裁判所所屬代言人規則別紙之通相定候條此旨布達候事

（別紙）

所屬代言人規則

第一條 治罪法中所屬代言人ト稱スルハ大審院及ヒ各裁判所所在ノ地ニ住居スル免許代言人ヲ云

第二條 裁判官ノ職權ヲ以テ選任シタル代言人辯護人ハ正當ノ事由ヲ證明スルニアラサレハ之ヲ辭スルヿヲ得ス

第三條 代言又ハ辯護受任中代言免許滿期ニ至リ引續營業セス又ハ廢業スト雖モ該事件終結ニ至ルマテ其代言辯護ヲ擔當ス可シ

第四條 代言又ハ辯護受任中ハ他ノ訴訟事件ヲ以テ其任ヲ闕クヿヲ得ス

第五條 裁判官ノ職權ヲ以テ代言人辯護人ヲ選任シタル場合ニ於テモ其謝金ハ被告人之ヲ擔當ス可シ

總テ謝金ニ付テハ出訴スルヿヲ許サス

治罪法第九十五條以下參看

○治罪法中犯人證人等押印ノ條實印ナキ者ハ拇印セシム　明治十四年十二月五日司法省丙第拾六號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ拇印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○令狀樣式ヲ定ム　明治十四年十二月十二日司法省丁第貳拾八號大審院裁判所ヘ達

治罪法中ニ掲ケタル逮捕狀呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀及差押書式別紙ノ通相定候條右ニ照準ス可シ此旨相達候事

(別紙略之)

○無資力ノ者ハ無代價ニシテ裁判言渡ノ謄本又ハ抜書ヲ下渡スヲ許ス　明治十四年十二月十五日司法省丁第三拾壹號裁判所ヘ達

本年本甲第七號布達裁判言渡ノ謄本又ハ抜書ヲ求ムル者代價ノ儀無資力ニシテ上納スル能ハサル者ニ限リ無代價ニテ下渡スモ不苦儀ト可心得此旨相達候事

治罪法第三百十五條參看

○治罪法令狀樣式大審院裁判所ヘ達ニ付司法警察官ニ於テモ右ニ照準取計ハシム　明治十四年十二月十九日司法省丙第拾七號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

治罪法令狀樣式別紙丁第貳拾八號ノ通大審院裁判所ヘ相達候條其旨可相心得且司法警察官ニ於テ令狀ヲ發スル時ハ右ニ照準シテ取計フ可シ此旨相達候事

(別紙略之)

○既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ令狀發付方　明治十四年十二月二十八日司法省丙第貳拾號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可心得此旨相達候事

治罪法第百廿二條參看

○治罪法ニ定メタル勾引狀ノ期限ハ休暇日ヲ算入セス　明治十五年二月六日司法省丙第四號裁判所警視廳府縣(東京府沖繩縣ヲ除ク)ヘ達

治罪法ニ定メタル勾引狀ノ期限ニハ總テ休暇ノ日ヲ算入ス可カラス但平常休暇ナキ官署ニ付テハ此例ヲ用ヰサル儀ト可心得此旨相達候事

○檢察官ニ於テ裁判所ノ命令及言渡ヲ執行スルニ當リ其謄本ヲ要スルトキ交付方　明治十五年二月十三日司法省丙第五號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

檢察官ニ於テ裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮スルニ當リ其命令書若クハ言渡書ノ謄本ヲ要スル時ハ該書記局ニ於テ速ニ其謄本又ハ抜書ヲ作リ交付ス可キ儀ト心得可シ此旨相達候事

治罪法第百三十五條參看

○既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スルノ手續　明治十五年二月十四日司法省丙第六號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左之通心得可シ此旨相達候事

第一條　逮捕狀ニハ典獄ノ報知書ニ依リ第貳號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相等ヲ詳記スヘシ

第二條　管轄地内ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

但管轄地ノ内外ニ拘ハラス急遽ノ際巡査ヲシテ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ナシ

第三條　管轄地外ハ第壹號書式ニ準シ人相書ヲ作リ之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ囑託スルヿヲ得

囑託ヲ受ケタル檢事ハ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作リ之ヲ管轄地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第四條　司法警察官ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル時ハ之ヲ管轄檢事ニ送致シ檢事ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ

治罪法第四十條參看

照會シ別段ノ事由アルニ非サレハ逮捕ノ地ニ於テ刑ノ執行ヲ爲ス可シ

（書式略ス）

○被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留方 明治十五年二月十六日 司法省丙第七號大審院裁判所檢視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留ノ儀ニ付東京輕罪裁判所檢事犬塚盛巍ヨリ別紙甲號ノ通伺出候ニ付乙號ノ通內訓ニ及ヒ候條爲心得此旨相達候事

（別紙）

甲號

明治十四年太政官第四拾六號ヲ以テ前略犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄ス可キ旨御布告相成候處右實際取扱方ノ儀ハ被告人逮捕ノ地ノ檢察官ニ於テ事件ノ搜檢ヲ密投シ其被告人ヲ管轄裁判所ニ送致スルヲ要セスト思料シタル時ハ事案ノ顛末ヲ犯罪地ノ檢事ニ通知シ併セテ其囑託アル可否ヲ照會シ其囑託ヲ待テ起訴可及手續ニ可有之果シテ然ラハ被告人所在地ノ司法警察官ニ於テ其現行犯人ト思料ス可キ者アル等現行犯ニ准シ處分シ得ヘキ被告人ヲ逮捕シ拘留狀ヲ發シ一應ノ搜査ヲ爲シタル後檢事ニ送致シタル時ノ如キ其拘留狀執行ヨリ概子已ニ六七日ヲ經過スルヲ以テ囑託ノ義ニ關シ檢事ヨリ前記ノ照會中拘留狀十日ノ期限ヲ過クル者往々之アリ然ルニ檢事ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ被告人ヲ責付スルノ職權ナキニ因リ重罪犯又ハ逃走等ノ恐アリテ解放シ得ヘカラサル者ニ付テハ如何ヒ處分ノ施シ樣モ無之去リ迚拘留日數經過ノ一點ニ拘束セラレ前書ノ照會ヲモ用ヒスシテ直ニ其被告人ヲ犯罪地ノ檢察官ニ送致スルカ如キハ囑託法ヲ設ケラレタル御旨趣ニ相戾リ可申又タ前書ノ照會一々電報ヲ借ルニ至テハ其事案ノ顛末ヲ盡ス能ハサル而已ナラス此等ノ事件ハ實際頻々遭遇スル所ニシテ其經費モ亦小額ナラサル儀ト存候就テハ右等ノ場合ニ於テハ如何處分致可然哉此段相伺候條至急何分ノ御指令ヲ仰キ候也

明治十五年一月二十四日　東京輕罪裁判所 檢事 犬塚盛巍

司法卿大木喬任殿

乙號

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留ノ儀ニ付伺之趣ハ豫テ管轄裁判所ヨリ囑託ヲ爲シタルモノト看做シ一面ハ其裁判所ニ豫審若クハ公判ヲ求メ一面ハ其犯罪ノ地ノ檢察官ニ其旨ヲ通知スヘシ此旨及內訓候也

明治十五年二月十五日　司法卿大木喬任

東京輕罪裁判所 檢事 犬塚盛巍

同年丁第拾九號ヲ以テ同一ノ件ヲ始審裁判所ヘ達ス（同文但丁十四號ヲ丙六號トス）

○治罪法第百三十五條ニ從ヒ人相書及逮捕狀ヲ作ルノ手續 明治十五年二月二十三日 司法省丁第拾四號大審院裁判所ヘ達

治罪法第百三十五條ニ從ヒ豫審判事ヨリ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ若クハ其檢事長ヨリ管轄地內ノ檢事ニ搜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ命スル時ハ本年本省丙第六號達第壹號書式ニ照依シテ人相書ヲ作リ其命ヲ受ケタル檢事ハ第貳號書式ニ照依シテ逮捕狀ヲ作ルヘシ此旨相達候事

○軍人軍屬ノ犯罪未決中逃走シタルニ付陸軍法衙ヨリ依賴ノ節捕縛取計方 明治十五年三月二十日 司法省丁第拾七號控訴裁判所ヘ達

軍人軍屬ノ犯罪未決中逃走シタルニ付陸海軍衙ヨリ捕縛方依賴有之候節ハ本年本省丁第拾四號達ニ依リ捕縛方取計フ可シ此旨相達候事

○治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官證人トシテ出庭方及著席 明治十五年三月二十二日 司法省丙第拾號大審院裁判所檢視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

治罪法第三百十五條參看

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トスル片ハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ於テ陳述セシム可シ此旨相達候事

○勅奏任官華族帶勳有位者禁錮以上ノ刑ヲ犯シタル時處分方 明治十五年三月二十七日 司法省丙第拾壹號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

司法省

(別紙)

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルヿヲ得此旨相達候事

明治十五年三月二十二日

太政大臣三條實美

○裁判言渡ノ謄本又ハ抜書ヲ下付スル費用ハ違警罪ニ限リ徴收セス 明治十五年三月二十七日 司法省丙第拾貳號裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

明治十四年十二月當省甲第七號布達裁判言渡ノ謄本又ハ其抜書ヲ下付スル費用ハ當分違警罪ニ限リ徴收セサル樣取計ヘシ此旨相達候事

○巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシメ又ハ人相書ヲ發シ捜査及逮捕請求處分心得方 明治十五年四月十二日 司法省丁第貳拾四號裁判所ヘ達

左之通豫審判事ニ及内訓候條為心得此段相達候事

輕罪裁判所

治罪法第二百六十條參看

治罪法第百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ被告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限リ暫ク其處分ヲ爲ス可キ者ニアラス又第百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スル者ハ專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハス悉ク人相書ヲ發スル者ニアラサルナリ此等ハ兼テ法意アル可キ事ナレ𪜈猶ホ誤解無之樣為念此段及内訓候也

明治十五年四月十二日

司法卿大木喬任

豫審判事

○既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ハ始審裁判所所在地ノ外其刑ヲ執行スル警部ニ於テ發セシム 明治十五年四月十七日 司法省丙第拾四號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ儀ニ付テハ昨明治十四年丙第貳拾號ヲ以テ相達置候處始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ現ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀ト可心得此旨更ニ相達候事

○被告人ヲ他ノ監倉ニ移スノ手續 明治十五年五月二日 司法省丙第拾八號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

治罪法第二百六十條ノ場合ニ於テ被告人ヲ重罪裁判所開廷ノ地ノ監倉ニ移ス時ハ檢事ハ前令狀ニ檢事長ノ命令書ノ寫ヲ添ヘテ重罪裁判所檢察官ニ送致シ其檢察官ハ是等ノ書類ヲ其地ノ監倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲ爲ス可シ其他法律ニ從ヒ被告人ヲ他ノ監倉ニ移ス場合ニ於テモ此例ニ準スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○裁判所ニ於テ檢證ノ爲メ囚人ヲ召連出張ノ節護送及費用支辨方 明治十五年六月五日 内務省乙第三拾五號警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

裁判所ニ於テ檢證ノ爲メ囚人ヲ召連レ他所出張ノ節ハ巡査ヲシテ護送セシムヘシ此旨相達候事

但護送巡査ノ旅費其他囚人ニ屬スル費用共都テ警察費ヨリ支辨スヘシ

治罪法第七十條參看

○法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ニ處スヘキ重罪事件ハ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬ス 明治十五年六月十日 司法省丙第貳拾壹號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)東京憲兵本部ヘ達

被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相達候事

○告發シタル官吏ヲ證人トシテ公庭ヘ呼出スト處分方 明治十五年六月十二日 司法省丙第貳拾貳號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)東京憲兵本部ヘ達

治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷ヘ呼出ス時ハ本年本省丙第拾號達ニ準シ處分スル儀ト心得可シ此旨相達候事

但シ巡査及ヒ等外吏ノ著席ハ此限ニアラス 同年丙第三拾壹號省達但書改正

治罪法第百九十條及第二百條參看

○撿證ノ爲メ囚人召連出張ノ節其地警察官ヘ護送引致方ヲ通知セシム 明治十五年六月十三日 司法省丁第三拾三號大審院裁判所ヘ達

審理ノ都合ニ依リ撿證ノ爲メ囚人召連他所出張候節ハ其地ノ警察官ヘ護送引致方通知可致尤右護送ニ屬スル費用ハ渾テ警察費ヨリ支辨ノ筈ニ候條此旨相達候事

○刑事ニ付出庭セシメタル證人鑑定人等ノ日當官廳ニ於テ立換渡スニ及ハス 明治十五年六月二十九日 司法省丙第貳拾五號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

刑法治罪法實施以來刑事ニ付出廷セシメタル証人鑑定人等ノ旅費日當等一時官廳ニ於テ立換渡ヲ爲シ候儀モ有之候處該旅費日當等ハ則裁判費用ニシテ總テ被告人ノ擔當スヘキモノナルハ勿論ノ儀ニ付自今右立換渡ヲ爲スニ不及ル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令及ヒ內訓本文ニ抵觸スル件々ハ都テ取消候事

○公訴裁判費用官ニテ擔當スヘキ場合金額支出方 明治十五年七月七日 司法省丙第貳拾六號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

治罪法第三百七條第二項公訴裁判費用官ニ於テ擔當スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支出スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令內訓本文ニ抵觸スル件々ハ取消候事

○官吏職務ニ關スル事件ニ付證明セシムル爲メ呼出ヲ要スル片取扱方 明治十五年十月二十八日 司法省丙第三拾貳號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)憲兵本部ヘ達

總テ官吏ヲシテ職務ニ關スル事件ニ付キ證明セシムル爲メ其呼出ヲ要スル片ハ本年當省丙第拾號達ニ準シ取扱フ可シ此旨相達候事

但シ巡査及ヒ等外吏ノ著席ハ此限ニアラス

治罪法第百六十八條參看

○樺戸及空知集治監ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル時司獄官ヘ囑託スルヲ得 明治十五年十二月十三日 司法省丙第三拾四號大審院裁判所府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

樺戸及空知ノ集治監ニ拘禁中ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル等ノ事アレハ本年第拾六號同第四拾壹號公布ノ趣モ有之ニ付該監司獄官ヘ囑託スルヲ得ヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○巡査ニテ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱タル事件ニ付テハ警部同樣ノ取扱ヲ爲サシム 明治十六年二月二十四日 司法省丁第九號大審院裁判所ヘ達

明治十四年十月當省甲第五號布達ニ據リ巡査ニ於テ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱事件ニ付テハ裁判上渾テ警部同樣ノ取扱ヲ爲スヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令內訓本文ニ抵觸スル條件ハ取消候事

○在本邦外國公使館ニ傭ハレタル內國人ニ對シ令狀發付方 明治十六年三月十二日 司法省丙第壹號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

刑事裁判上在本邦外國公使館ニ傭ハレタル內國人ニ對シ發スヘキ令狀ハ明治七年第百貳拾八號公達ニ據リ公使館ニテ唯諾ノ上執行セシムヘキハ勿論ニシテ其ノ唯諾ヲ經ルノ手續ハ明治十四年第五拾三號公達ノ旨モ有之ニ付大審院幷裁判所ハ其事柄ヲ明記シ當省ヘ申出指令ノ上其令狀ヲ發シ又警視廳府縣ニ於テハ其長官ヨリ外務省ヘ申出右唯諾ヲ經ルノ手續キヲ了シ令狀ヲ執行セシムヘキ儀ト心得ヘシ爲念此旨相達候事

但本文令狀執行者ハ專ラ明治七年第百貳拾五號達ノ旨趣ニ據リ聊不都合ノ取計無之樣厚ク注意セシムヘシ

○勅奏官華族幷有位帶勳者犯罪取扱ニ付更ニ心得方ヲ達ス 明治十六年五月十四日 司法省丙第貳號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

勅奏官華族幷ニ有位帶勳者犯罪取扱方ノ儀ニ付別紙ノ通リ太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

但御指令文中十五年三月二十二日附御達ハ同年當省丙第拾壹號達ト可相心得事

勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀伺

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪取扱方ノ儀ニ付テハ明治十五年三月二十二日附ヲ以テ御達有之候處其罰金ニ處スヘキモノト雖モ或ハ本人ヲ出廷セシムル場合モ有之且又拘留ノ刑ニ處シ及ヒ罰金科料ヲ納完セサル節ハ則換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ニ處スヘキ儀モ有之候條右本人ヲ出廷セシムル場合及ヒ換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スヘキ時ハ矢張其時々奏聞可致儀ト相心得可然哉此段相伺候也

明治十六年三月三十一日 司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

朱書

伺之通

但十五年三月二十二日附其省ヘ達中帶勳有位者トアルハ勳六等以上從六位以上ヲ指シタル儀ト可相心得事

明治十六年五月八日

○監倉若クハ獄舍ニ在ル被告人ヘ書類送達方 明治十六年七月十四日 司法省丙第四號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

監倉若クハ獄舍ニ在ル被告人ヘ送達スヘキ渾テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署ヘ送達ノ手續ヲ囑托シ該署ニ於テハ規則ニ從ヒ本人ニ送達シ令狀ハ其正本其他ハ送達書ノ一本ヲ裁判所ヘ返還スヘキ樣取計ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令內訓本文ニ抵觸スル條件ハ渾テ取消候事

治罪法第四十四條參看

○陸軍治罪法施行ニ付已決囚ニシテ重輕罪ヲ犯ス者等有之時ハ地方管轄裁判所ニ送付セシム 明治十六年九月二十一日 司法省丁第貳拾三號大審院裁判所ヘ達

今般陸軍治罪法施行相成候ニ付キ左ノ通陸軍卿ヨリ照會有之候條爲心得此旨相達候事

已決囚罪囚其他裁判宣告ニ依リ軍籍ヲ脫シタル者ト雖モ犯罪之レ有ル時ハ舊慣ニ據リ軍衙ニ於テ審判致來候處今般陸軍治罪法御頒布ニ付テハ特例アルモノヲ除ノ外ハ軍衙ニ於テ審判シ得ヘカラサル者ニ有之候間右已決囚ニシテ重輕罪ヲ犯ス者等有之候時ハ地方管轄裁判所ニ送付セシメ候間豫メ御通達相成度此段及御照會候也

明治十六年九月十三日 陸軍卿代理 參事院議長山縣有朋

司法卿大木喬任殿

追テ自今本文ノ如キ罪囚ハ悉ク地方監獄ニ交付ノ見込ニ有之候此段申添候也

○保釋責付中ノ被告人取締方心得 明治十六年十一月五日 司法省丙第六號警視廳府縣ヘ達

治罪法第二百十條以下參看

保釋貸付中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通各裁判所ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

丁第三拾號　　裁判所

保釋貸付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付キ保釋貸付ヲ爲スノ際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條　治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ居置ク可キ亅ハ言ヲ待タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スル亅ヲ得ス若シ已ムヲ得サル事由アル𪜈ハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條　裁判所ノ管轄地内ト雖𪜈任所外ニ於テ一泊以上滯在スル𪜈ハ滯在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラサル𪜈ハ其住所ノ地ノ戶長ニ屆置ク可シ

第三條　代言人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スル亅ヲ得ス

第四條　治罪法第百二十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其貸付ヲ受ケタル者モ亦同シ

右相達候事

○刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用ハ裁判費用ニ立タス　明治十六年十一月十三日司法省丙第九號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

刑事ニ付キ警察官ノ處分ニ屬スル費用ハ起訴ノ前後ニ拘ハラス裁判費用ニ相立タサル者トス然レ𪜈豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲シタル場合ハ此限ニ在ラス此旨爲心得相達候事

但本文ニ抵觸スル指令內訓ハ取消候事

○犯罪證據物トシテ戶長役場備置ノ書類差押手續　明治十七年五月三十日司法省丙第壹號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）憲兵本部ヘ達

犯罪證據物トシテ戶長役場備置ノ書類ヲ差押フル儀ニ付甲號福井縣上申ニ對シ乙號ノ通及指令候條爾後戶籍帳等ノ差押ニ付テハ右ノ手續ニ依リ取扱フ可キ儀ト心得可シ此旨相達候事

甲號

裁判所ニ於テ犯罪證據物トシテ戶長役場備置ノ要書差押ヘタル節還附方ノ儀ニ付上申

犯罪證據物トシテ裁判所ニ於テ戶長役場備置ノ戶籍帳又ハ土地建物船舶賣買讓渡質入書入奧書割印簿等ヲ差押ヘ數十日間還附セサル亅アリ然ルニ戶長役場ニ於テハ部下ノ人民生死送入籍其他ノ異動加除ヲ要シ又ハ陸續公證ヲ請ヒ就中質入書入契約ノ如キ務消盡ニ據リ公證取消ノ儀申出ル者アルモ本簿ヘ照較消印スル能ハサルヲ以テ其旨ヲ具ヘ簿冊下戾方裁判所ヘ照會スルモ某事件ニ付差押ヘタル證據物ナル故一件落着迄還付シ難キ旨回答有之取扱上頗ル差支候趣ヲ以テ伺出候向アリ右ハ犯罪證據物トシテ差押ヲ要スルハ其一部分ニ止ルヘクシテ而シテ該簿冊ニ登載セル其他ノ事件全体ニ關シ行政上取扱ニ支障ヲ來シ不都合不尠就テハ斯場合ニ於テハ其必要ノ廉ハ裁判所ニ於テ謄寫シ本書加除スルヲ得サル樣甚紙契印等ヲ爲シ而シテ簿冊ハ直ニ還付スヘク樣致度御詮議ノ上何分ノ御指揮相成度此段上申候也

明治十七年一月二十九日　　福井縣令　石黑務

內務卿山縣有朋殿
司法卿山田顯義殿

乙號

書面上申之趣聞屆候尤裁判所ニ於テ謄寫セシ該書ヘハ戶長之レニ調印スヘシ若シ其謄寫ニ拘ハル內ニ加除等ヲ要スル時ハ其都度裁判所ノ許否ヲ得ヘキ儀ト可心得事

明治十七年五月二十八日

○官吏職務上刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時旅費日當請求方　明治十七年六月十三日第五拾七號官省院廳府縣ヘ達

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖トモ被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セサル儀ト心得可シ

但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜收入トシテ大藏省ヘ納付ス可シ

右相達候事

○已決囚ニ對スル宣告又ハ證人トシテ出廷セシメ用濟トナリタル時司獄官ヘ書類送致又ハ報知方　明治十七年六月二十三日　司法省丙第貳號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

已決囚ノ犯罪ニ付キ之ヲ裁判所ニ呼出シ審理ノ末刑ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テハ明治十五年當省丙第八號達ニ依リ檢察官ヨリ其宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送達スルハ勿論自今已決囚ニ對スル其他ノ宣告ニ付テモ其豫審ニ係ルト公判ニ係ルトヲ問ハス書記ヨリ宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送致シ又證人トシテ出廷セシメタル已決囚用濟ニ至リタル時ハ亦書記ヨリ其旨ヲ司獄官ニ報知ス可キ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○郵便犯則者ニ對スル未納税不足税等徵收方　明治十七年八月十三日　司法省丙第三號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)驛遞本部ヘ達

郵便犯則者ニ對スル未納税不足税等徵收方ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事

司法省

驛遞局ヨリ郵便犯則者ヲ告訴スルト倂セテ未納税不足税等ノ徵收ヲ請求スルトキハ其請求ニ應シ之ヲ受理スヘキ儀ト可心得此旨相達候事

明治十七年七月二十三日　太政大臣三條實美

○帶勳有位者罪ヲ犯シ公權剝奪又ハ停止ノ言渡アリタル片屆出方　明治十五年三月六日　司法省丙第九號大審院裁判所府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

帶勳者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタル片ハ其罪狀幷刑名宣告文ノ寫ヲ以テ當省ヘ可屆出此旨相達候事

但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章幷年金票共收奪ノ上當省ヘ差出スヘク候事

○醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之節內務省ヘ通知方　明治十五年八月二十一日　司法省丁第四拾貳號大審院裁判所ヘ達

本年八月第三拾九號公布ニ依リ今般內務卿ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之處斷致シ候節ハ其都度該宣告文謄本相添內務省ヘ通知候樣可致此旨相達候事

○恩給扶助料ヲ有スル元軍人並軍人及寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪停止ノ處分ヲ受ケタル者アル片大藏省ヘ通知方　明治十六年四月二十七日　司法省丁第拾五號大審院裁判所ヘ達

明治八年第百四拾八號公達海軍退隱令並ニ明治九年第九拾九號公達陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ受ケ並ニ該恩給ヲ有スル軍人ニシテ治罪法第二百七十三條ニ據リ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アル片ハ其都度直ニ大藏省ヘ通知可致此旨相達候事

但新法實施已後是迄本文ノ處分ヲ受ケタル者有之候ハヽ其旨直ニ大藏省ヘ通知可致事

○西洋形船船長運轉手機關手免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節農商務省ヘ通牒方　明治十六年七月五日　司法省丁第貳拾壹號大審院裁判所ヘ達

明治十四年十二月第七拾五號公布西洋形船船長運轉手機關手免狀規則ニ據リ免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節ハ刑名並ニ宣告ノ月日ヲ詳記シ其都度直ニ農商務省ヘ通牒スヘシ此旨相達候事

○陸軍常備下士卒服役中逃亡罪ヲ犯シ處分セシ片本人所管ヘ通報方　明治十六年八月七日　司法省丙第六號府縣(東京府ヲ除ク)ヘ達

陸軍常備下士卒服役中ノ者逃亡罪ヲ犯シ其處分ヲ爲シタル節ハ其人名刑科ヲ詳記シ其都度本人所管(隊附ナレハ該隊長)ヘ速ニ

通報可致此旨相達候事

○華族罪ヲ犯シ拘留シタル時宮內省ヘ通牒方 明治十六年十一月八日 司法省丁第三拾弐號大審院裁判所ヘ達

華族ノ戴位記ノ有無且戶主隱居子弟ニ拘ハラス罪ヲ犯シ拘留シタル時ハ自今其院裁判所ヨリ直ニ宮內省ヘ通牒シ猶刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其宣告書ノ謄本ヲ添ヘ是亦同様直ニ可致通牒此旨相達候事

○醫師醫業ニ關シ罪ヲ犯シ處斷セシトキ內務省ヘ通知方再達 明治十六年十二月二十八日 司法省丁第三拾九號大審院裁判所ヘ達

本年第三拾五號布告ヲ以テ明治十五年第三拾九號布告被廢候ニ付同年當省丁第四拾弐號達ハ自然消滅ノ處今般內務卿ヨリ更ニ照會ノ趣モ有之候條同省ヘ通牒方從前ノ通リ可取計此旨相達候事

○勳章年金褫奪及停止取扱手續 明治十七年一月十二日 司法省丁第壹號大審院裁判所ヘ達

勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通被達候條此旨相達候事

司法省

別紙陸軍省伺勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀朱書ノ通及指令候條此旨相達候事

明治十六年十二月廿八日

太政大臣三條實美

(別紙)

勳章年金褫奪及停止取扱手續之儀ニ付伺

先般勳章年金褫奪及ヒ停止取扱手續御達相成候處其以前卽チ本年第弐拾弐號御布告後第三拾九號御達迄之間ニ於テ右ニ適該スル者アルモ勿論該手續ニ準據ス可カラサル儀ト相心得可然哉之旨伺出候處右ハ本年第弐拾弐號布告發布後ハ第三拾九號達ニ據リ處分スル儀ト可相心得旨御指令之趣致承仕候然ルニ該手續第二條ニ據レハ勳章褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノト有之候處右第弐拾弐號御布告後第三拾九號御達迄之間ニ於テ已ニ輕重禁錮ノ處分ヲ受ケ又ハ已ニ其刑期滿期後之者ト有之右等ハ如何ノ手續キヲ以テ褫奪方取扱可然哉至急何分ノ御指揮相成度此段更ニ相伺候也

明治十六年十一月十五日

陸軍卿大山巖

太政大臣三條實美殿

(朱書)

伺ノ趣本年第弐拾弐號布告後第三拾九號達發布以前ニアツテ既ニ刑ノ言渡ヲナシ未タ勳章褫奪ノ手續ヲナサヽルモノハ該達第三條ノ手續ニヨリ更ニ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘキ儀ト可相心得事

明治十六年十二月廿八日

○恩給扶助料ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪停止若クハ禁錮以上ノ刑ニ處シタルトキ屆出方 明治十八年一月六日 司法省丁第壹號大審院裁判所ヘ達

自今官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時ハ直ニ其宣告文寫書ヲ添當省ヘ可屆出此旨相達候事 十八年丁第六號省達ヲ以テ但書消滅ノ儀心得シム

○陸軍武官傷痍扶助死亡者祭粢家族扶助概則並海軍退隱令ニ據リ扶助料又ハ退隱料ヲ受クル者公權剝奪停止若クハ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時屆出方 明治十八年五月二十日 司法省丁第拾三號大審院裁判所ヘ達

官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時其屆出方ノ儀本年丁第壹號ヲ以テ相達置候處明治八年太政官第四拾八號達陸軍武官傷痍扶助及死亡者祭粢家族扶助概則並ニ同年太政官第百四拾八號達海軍退隱令ニ據リ扶助料又ハ退隱料ヲ受クル者モ右達ニ準シ當省ヘ可屆出此旨相達候事

●伺指令

●法律疑岐ノ儀ニ付愛媛縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年七月七日

本月十三日付第二九〇二號ヲ以テ豫審ノ末免訴ノ言渡ヲ受ケ確定セシ後其訊問調書ヲ新聞紙上ニ掲載セシ者處分方靜岡始審裁判所高津檢事伺御指令御訓示相成候處 若記載セシトキハ新聞條例第三十三條ニ依リ處分スル儀ト心得可然

哉此段相伺候也

指令　伺之通　十六年七月廿四日

●違警罪裁判ニ付證人呼出ニ應セサル者處分方ノ儀ニ付新潟縣ヨリ司法省ヘ伺　十六年八月四日

第一條　治罪法第二百九十六條(前略)撿察官之意見ヲ聽キ前キニ定メタル科料罰金之二倍云々トアル前之字ハ同法第二百九十三條之各項ヲ指シタルモノナルヤ或ハ初度呼出シニ應セサリシ時右各項之範圍内ヲ以テ云ヒ渡シタル金額ヲ指シタル儀ナルヤ

第二條　治罪法第二百九十六條ニ據リ二倍之科料金ヲ云ヒ渡ス時貳圓以上(壹圓五拾錢ノ二倍ノ如シ)之金額ニナルモ科料ト稱シ得ルハ勿論之儀ナルヤ

右者疑義アリ決行候間至急何分之御指令相成度此段相伺候也

指令　十六年八月十五日

第一條　治罪法第二百九十三條ノ各項ニ記載シタル科料罰金ノ範圍ノ二倍ヲ云フ者ニシテ其範圍内ヲ以テ先キニ言渡シタル金額ノ二倍ヲ云フニアラス

第二條　科料ト稱スヘシ但シ刑法第七十二條第二項ニ依リ二圓四十錢以上ニ至ルヲ得ス

●京都府ヨリ治罪法中疑義司法省ヘ請訓　十六年八月卅日

第一條　治罪法第百三十三條ニ家宅ニ潜匿シタリト思料シタル時ハ云々トアリ現ニ見認ル時ト雖モ客年第四十六號公布第五項ヲ除クノ外日出前日没後ハ家宅捜索難致筋ニ有之候哉

第二條　全第百八十一條第百八十二條ニ左ニ記載シタルモノハ證人ト爲ルヿヲ許サスト有之立會人トナルヿヲ得サルノ明文無之ニ付無能力者ヲ除クノ外立會人トナルヿヲ得ル儀ト心得可然哉右及請訓候也

右内訓　十六年九月十一日

請訓ノ趣第一條令狀執行人ニ於テ現ニ目撃シタル場合若クハ戸主ノ承諾アルトキハ何時ニ拘ハラス家宅捜索ヲ爲スヿヲ得第二條ハ見解ノ通此旨及内訓候也

●岐阜輕罪裁判所撿事ヨリ司法省ヘ令狀ニ書記署名ヲ要スルヤ否ニ付請訓　十六年九月十八日

本年第八號ヲ以豫審判事豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スル事ヲ得ト御布告有之ニ付書記ノ立會ナクシテ取調タル豫審事件ノ終結言渡書ノ如キハ無論書記ノ署名ヲ要セサル儀ト存候得共總テノ令狀ニハ治罪法第百三十條第二項ニ依リ書記ノ署名捺印ヲ要ス可キモノナルヤ疑義ヲ生シ候ニ付此段請訓候也

内訓　十六年十月四日

別紙請訓ノ趣ハ令狀ハ勿論終結ノ言渡書ヲモ書記ノ連署ヲ要スヘキ者ト心得可シ此段及内訓候也

●豫審終結處分ノ儀ニ付前橋始審裁判所撿事ヨリ司法省ヘ伺　十六年九月十三日

猥褻姦淫ノ如キ被害者ノ告訴ヲ待テ論スヘキ罪其告訴ニ因リ撿事ノ請求シタル事件ハ假令豫審中被害者ノ棄權アルモ豫審判事ハ通常ノ規則ニ從ヒ仍終結ノ處分ヲ爲スヘキ筋ト相心得候得共意見反對ノ向モ有之ニ付此段相伺候也

但豫審判事ニ於テ未豫審ニ着手セサル内被害者ノ棄權アル場合ト雖モ撿事ノ請求ニ係ル事件ハ本文同様處分スヘキ儀ト相心得可然ヤ添テ相伺候也

指令　十六年九月廿九日

撿察官ノ起訴ヲ爲シタル後被害者棄權ヲ爲シタル時ハ豫審判事ニ於テ本案ノ取調ヲ要セス直チニ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キ者トス

●官吏告發ノ儀ニ付福岡縣ヨリ司法省ヘ伺　十六年九月二十七日

官吏職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪アルヿヲ認知又ハ思慮シタルトキ相當ノ官吏ニ告發スヘキハ治罪法第九十六條ニ於テ命令アル儀ニ有之候然ルニ告發後若其被害人罪トナラサル場合其損害ノ償ヲ要ムルモ法律ノ命令ニヨリ職務ヲ以テ爲シタルモノナレハ其要償ノ義務ヲ有セス同法第十七條ニ準據スヘキモノト被存候得共同條ニハ撿察官又ハ司法警察官ト指定シ一般官吏ニ適用スルノ明文ト難認候條爲念一應相伺候也

伺ノ趣治罪法第十七條ニ掲載シタル官吏ト均ク要償ノ訴ヲ受ケサル儀ト心得ヘシ

指令 十六年十月九日

●京都始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ哀訴ニ關スル書類遞送方ノ儀ニ付請訓 十六年九月廿六日

治罪法第四百三十七條ヲ按スルニ哀訴ヲ爲サントスル者ハ大審院ノ書記局ニ其申立ヲ爲スヘキヿ明瞭タリト雖氏哀訴者タルヤ罰金及ヒ拘留科料ノ刑ニ處セラレタル者ヲ除クノ外多クハ收監シアルヲ以テ大審院所在ノ地ニ在セサル訴訟關係人ハ直ニ該院ノ書記局ニ之ヲ申立ツルヿ甚タ難シトス而メ茨城縣ノ伺ニ對スル明治十五年五月三十一日ノ御指令ニ依レハ在監ヨリ差出シタル哀訴狀ハ司獄官吏ヨリ其書類ヲ大審院書記局ヘ回送スヘキ旨趣ナルヲ以テ是ノ點ニ對シ聊疑訝ヲ生ス何トナレハ哀訴ノ申立書ヲ司獄官吏ヨリ大審院ヘ送付セハ原裁判所ノ檢察官ハ其哀訴アリシヿヲ覺知セサルニヨリ法律上執行ヲ停止スヘキ日時即治罪法第四百三十八條ニ定メタル三日間ヲ經過スレハ刑ヲ執行スヘキ指揮書ヲ典獄ヘ發セサルヘカラス共レ之ヲ發付スルモ哀訴アリタル上ハ實際執行ハ停止スヘキモノナルニ付旣ニ發シタル指揮書ハ事實ニ抵觸スルヲ如何セン且不在監ノ訴訟關係人ニシテ哀訴ヲ爲サントセハ遠隔ノ地方ニ在スルモノト雖氏已レ自カラ大審院ニ出頭シ其書記局ヘ哀訴ノ申立ヲ爲スヘキ儀ニ之レアルヘシ然レハ其手續タルヤ頗ル迂遠ニ渉リ實際ニ徴シテハ施行シ難キ場合ナシト概言スヘカラス故ニ哀訴ニ關スルモノト雖氏其書類ノ遞送ハ都テ原裁判所書記局ノ取扱ニ屬セシムル時ハ哀訴ノアリタルヿハ書記局ヨリ檢察官ニ通報スルハ難キニアラス加之拘留不拘留人ノ區別ナク哀訴申立ノ手續ハ同一ニ期シ實際ニ於テモ其宜キヲ得法律ニ矛盾スル所ナシ因テ哀訴ニ關スル書類ノ遞送ハ原裁判所書記局ノ取扱ニ屬スヘキ儀ト相心得可然哉此段仰内訓候也

內訓 十六年十月九日

請訓之趣哀訴ハ本人ヨリ代言人ヲ差出スカ又ハ重罪事件ニ係リ大審院ヨリ其代言人ヲ撰任セシ場合ニ非サレハ之ヲ爲ス可カラス但シ治罪法第四百三十八條ニ依リ大審院ノ言渡ハ三日間執行ヲ停止スヘキ者ナレハ其執行ヲ爲シ得ヘキニ至リ檢事長ヨリ執行ヲ命スヘキニ付原裁判所ノ檢察官ニ於テ哀訴アリシヿヲ知ラスシテ執行命令書ヲ發スルカ如キ場合ナカル可シ

●山形始審裁判所米澤支廳檢事ヨリ司法省ヘ裁判執行方ノ儀ニ付請訓 十六年九月二十六日

例ヘハ玆ニ重禁錮三月ニ處セラレタル者アランニ該言渡檢事ノ上告ニ係リ其後滿監二月ニシテ保釋ヲ許サレタリ然ルニ保釋中餘罪發覺シ又ハ更ニ罪ヲ犯シタルヲ以テ大審院ノ判決ヲ待タス直チニ重禁錮五月ニ處スルノ裁判言渡アリタル場合ノ如キハ上告ニ係ル事件ノ刑期ニ拘ハラス其執行ヲ爲スヘキハ勿論ナリト雖モ被刑者ハ前裁判ニ於テ已ニ二月ノ滿監アルヲ以テ此滿監二月ヲ扣除シ執行官ハ餘ル三月ノ執行ヲ爲スヘキ哉將タ上告ニ係ル事件ト本件トハ全ク別物ナルニ依リ之ヲ扣除スルノ限ニアラサルヤ若シ扣除スヘカラサル者トセハ後發ノ罪ニ依リ受ケタル刑執行濟ノ後大審院ニテ上告ヲ棄却セラレ又ハ前判ノ刑期ヨリ輕キ重禁錮二月ニ處スルノ言渡アリタルトキノ如キハ前後併セテ七月ノ拘束ヲ爲スニ至リ被刑者ニ於テハ其不利益尠カラス且刑法第百二條ノ精神ニモ戾ル樣被考候ニ付決兼候條此段請訓候也

內訓 十六年十月九日

請訓ノ趣前段見解ノ通

●違警罪犯誤裁判改正之儀ニ付神奈川縣ヨリ司法省ヘ伺 十六年十月二十九日

違警罪犯トシテ科料又ハ拘留ノ刑ニ處シタル者其裁判全ク過誤ニ出テ入ルニ失シタル事確然タル時ハ便宜ノ手續ヲ以テ前裁判ヲ改正致シ不苦候哉

指令 伺之通 十六年十一月二日

●根室輕罪裁判所檢事ヨリ司法省ヘ繼續犯罪疑義ノ件請訓 十六年十月六日

玆ニ新法實施以前ニ在テ屬籍氏名ヲ詐稱シ娼妓營業免狀鑑札ヲ受其鑑札ハ一旦上納シタルモ又其前詐稱セシ屬籍氏名ヲ名乘リ同シク又新法實施以前娼妓營業免狀鑑札ヲ受ケ其營業中即チ新法實施後ニ至リ該鑑札面ノ屬籍氏名字形等ノ既ニ消滅ニ歸セント慮ハカリ再度其筋ヘ書替改貰ヒ受ケタル後チ該屬籍氏名等ハ全ク是迄詐稱シ居タリト自首

スル被告事件ノ如キハ一寸猥褻犯罪ノ如シト雖モ之ヲ熟考スルニ於テハ固ト其屬籍氏名ヲ詐稱シ其他詐欺ノ所爲ヲ以テ免状鑑札ヲ受クル罪ノ如キハ既ニ其鑑札ヲ受ケタル時其罪ノ成立タル者ニシテ何ソ新法實施後ニ及ホシテ娼妓營業シタルト否トニ關スルノ理アランヤ又其新法實施ノ以前ニ在テ受ケタル免状鑑札面ノ文字等新法實施ノ後ニ至リ殆ト其消滅ニ歸サン事ヲ慮カリ其筋ヘ書替改貰受ケタル所爲ノ如キモ固ト惡意ヲ以テ更ニ屬籍氏名ヲ詐稱シ書替改メヲ爲シタル者ニアラサレハ敢テ新法ヲ以テ論スル可キノ限ニ非ストセン歟果ソ然ラハ則猥褻犯罪ニ非スソ刑法第三條ニ依リ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從フテ處斷可然ト者且スルモ如此犯罪ハ猥褻犯罪ナルヲ以テ新法ノミニテ罰ス可キモノナリトノ論アリ疑義ヲ生シ候間相伺候條何分ノ御訓示相成度此段御内訓奉仰候也

内訓　十六年十一月九日

請訓之趣ハ前段見解ノ通

但新法實施後詐稱ノ氏名ヲ以テ鑑札書替願出タル族ハ刑法第二百三十一條ニ依リ處分スヘシ

●高知始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ姦罪ニ對スル棄權之儀ニ付請訓　十六年十一月一日

茲ニ一ノ犯姦既ニ處斷ヲ經當時上告中ニ係レル者ニ對シ姦婦ノ本夫ヨリ其姦夫ニ對スル告訴ニ限リ棄權致度旨願出タルモノアリ右ハ裁判宣渡以前トモ逃ヒ宣渡以後ニ係ルモノハ裁判未確定ト雖モ無論公訴ヲ消滅スルノ力ナク又假令宣渡以前ト雖モ所謂犯姦ノ如キニ至テハ即チ二人一罪ヲ爲シタルモノニテ一半ヲ問ヒ一半ヲ措クノ理ナキヲ以テ姦夫一人ニ限リタル願下ハ棄權ノ効ナキモノト相心得候得共其分界上ニ於テ聊疑義ヲ生シ候ニ付何分之御指揮相成度此段仰御内訓候也

内訓　十六年十一月十五日

請訓ノ趣姦夫ニ對シ棄權ヲ爲シタル時ハ姦婦ニ對スル告訴モ從テ消滅ス但裁判宣渡後ハ棄權スルモ其効ナキ者トス此旨及内訓候也

●神戸始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ公訴私訴期滿免除ノ儀ニ付請訓　十六年十一月六日

第一條

期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算スト雖モ新法實施以前ノ犯罪ニ付テハ明治十四年十二月卅一日迄ハ其期限ヲ中斷シタルト同一ノモノトス但前後通算ノ法ハ治罪法第十四條第二項但書ノ通リタルヘシ云々先般上田始審裁判所ノ伺ニ對シ御指令相成且一般ヘモ御達相成候處右御指令ノ趣意ハ例ヘハ明治十四年十二月卅一日迄ニ既ニ滿六年ヲ經過シタルモノト雖モ新法御實施ノ日ヨリ滿三ケ年間ハ之ヲ罰スル事ヲ得ルノ儀ニ可有之哉又ハ其犯罪ノ日ヨリ新法御實施ノ日迄既ニ滿六年ノ期限ヲ經過シタルモノハ公訴ヲ免カレ候儀ニ可有之哉

第二條

新法御實施前ノ犯罪公訴期滿免除ノ期限起算方ノ儀前條初項ノ解釋ノ如キニ候ハヽ被害者ノ不利稍々渺シト雖モ若シ後項ノ如キニ候ハヽ被害者ニ於テ依然一大不幸ヲ被ルノ恐レ不少ト考量致シ候何トナレハ舊法施行ノ際ニ在テハ假令數年ヲ經過シ赦罪減免ニ依リ罰ヲ免カルヽモノト雖モ被害者其犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル事實ヲ告訴シ其證充分ニシテ且贓品賊手ニアル時ハ法官追徴シテ被害者ニ還付スルノ成例ニ有之候處新法御實施公訴私訴期滿免除ノ制ヲ被設候カ爲メ舊法ノ際犯罪ニ因テ害ヲ被リタル者其物件假令賊手ニアル顯然タルモ犯罪ヲ原由トシテ之ヲ告訴スルヲ得ス何トナレハ治罪法第十二條ニ依レハ公訴私訴共ニ期滿免除ノ期ヲ同シフスレハナリ抑モ贓物返還ノ訴ノ如キハ刑事ニ附帶スルモ當民法ノ原則ニ從ヒ支配スヘキモノナレハ假令新法舊法ヨリ輕キヲ以テ舊犯罪ニ公訴期滿免除ヲ適用スルヲ得ルモ贓物返還ノ訴ニマテ新法ヲ適施スルハ法理上不可ナルノミナラス實際上大ニ被害者ノ不幸少カラスト存候依テ新法御實施前ニ在テ犯罪ノ爲メ害ヲ受ケタル者ハ其贓品現存スル時ハ賊手ニ在ルト否トヲ問ハス（例ヒハ詐欺ノ手段ニ係リ詐取サレタル地所家作船舶ノ類）其証判然タルモノハ公訴ノ期滿免除ニ拘ラス贓物追徴ノ處分總テ舊法ノ手續ニテ取扱候樣致シ度ト思考仕候

第三條

若シ前條ニ陳述セル如ク私訴滿期免除ニ付テハ新法御實施以前ノ被害事件ニ遡ラサル儀ニ有之候得ハ舊法贓物追徴

處分ノ如ク刑事裁判所ニ於テ取扱候方頗ル便益ト被考候得共果シテ刑事裁判所ニ於テ處分シ可然哉

內訓　十六年十一月十七日

請訓ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條　後段見解ノ通但舊惡減免例圖ニ照シ減免ニ係ル者ハ期滿免除ノ期限ヲ經過セスト雖モ仍ホ舊法ニ依リ減免ス

第二條第三條　舊法ノ舊惡減免ニ該ルヘキ場合ハ治罪法第三百六條ノ旨意ニ依リ私訴ノ裁判モ併テ刑事裁判所ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ルモ若シ新法ノ期滿免除ニ該ルヘキ場合ニシテ本案ノ辯論終結前ニ在テ免訴スヘキ時ハ刑事裁判所ニ於テ其私訴ニ付テノ裁判ヲ爲ス可ラサルニ付民事原告人ハ更ニ民事裁判所ニ出訴セサル可カラス

●重罪裁判言渡ノ際辯護人出廷セサル片取扱方ノ儀ニ付東京控訴裁判所檢事ヨリ司法省ヘ伺　十六年十一月廿九日

當重罪裁判所ニ於テ裁判宣告ノ際ニ當リ被告人ヨリ選任シタル代人ニモアラス又辯護人ノ資格ヲ有スル代人ニモアラス唯一箇ノ人民ニシテ辯護人ノ代人ト爲リ辯護人ノ席ト定メタル其席ニ就カシメ裁判官モ之ヲ退ケス其儘ニシテ宣告スルコト往々有之右ハ啻法廷ヲ汚スノミナラス被告共人ノ爲メニモ利益ヲ見ス又治罪法ノ精神ニモ違背スヘシト思考セリ抑辯護人ノ職務ハ裁判ノ始メヨリ其結局ニ至ルマテ被告共人ノ爲メ辯護スヘキモノナレハ裁判ノ結果如何ナルヲ聽キ辯護ト相反シ不當ト認メタル片ハ被告人ヲシテ上告セシムルノ權アリ然ルニ裁判宣告ノ際辯護人ヲ闕カサレハ被告人ニ於テ其宣告ヲ明遼又ハ明落ナキヲ保シ難シ遂ニ多少ノ利益ヲ失フコトアルヘシ何トナレハ裁判宣告ハ被告共人ニ取リテ最モ緊要ノ時間ナリ辯護人ノ辯論モ此ニ至テ始テ有效無效ヲ知ルニ足ルモノナリ故ニ辯護人ハ唯事實辯論ト法律辯論トノミニ止マラス裁判終局ニ至ル迄被告共人ノ爲メニ利益ヲ謀リ上告スヘキハ上告モ爲サシムヘシ治罪法第三百八十一條第一項ノ明文ノミヲ以テ論スレハ辯護人ハ唯辯論ヲ爲ス時ニ限ルモノヽ如シト雖𪜈法廷上ノ体裁ヨリ見ルモ辯護人ノ資格ヨリ論スルモ公判終局迄ハ辯護人其席ニ就クヲ以テ治罪法ノ精神ト謂ハサルヲ得ス何等關係モナキ一箇ノ人民ヲ代人ト爲シ辯護人ノ席ニ就カシムルニ至テハ啻法廷ヲ汚スノミナラス被告共人ニ取テ毫モ利益ヲ見ス故ニ裁判宣告ノ當日辯護人疾病等ニ罹リ出廷シ難キ片ハ辯護人ノ資格ヲ有スル者ヲシテ代人ト爲シ出廷セシメ候得ハ治罪法ノ精神ニモ相適シ可申ト存候右ハ如何相心得可然哉至急御指揮ヲ仰キ候也

指令　伺之通　十六年十二月四日

●答辯書等差出方期限之儀ニ付前橋始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ伺　十六年十二月五日

甲裁判所ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ欠席言渡ヲ受ケタル被告人其公判前乙地ニ於テ又重罪ヲ犯シ逮捕セラレタル際欠席言渡アリタルコトヲ知リ該言渡ニ對スル故障ヲ乙裁判所ニ爲シタル內ハ勿論乙裁判所ニ於テ之カ判決ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ對手人ヨリ差出スヘキ答辯書等ノ期限ハ甲裁判所ヨリ故障ニ關スル一件書類ノ送致アリタルヨリ起算スル儀ト相心得可然ヤ此段相伺候也

指令　十六年十二月廿日

別紙伺ノ趣豫審ノ言渡ハ其謄本ヲ被告人ノ住所ニ送達シタル後治罪法第二百四十七條ノ期限ヲ經過スレハ被告人ニ於テ之ヲ知ルト否トヲ問ハス確定スヘキ者ニ付伺面ノ如キ場合ハ實際甚タ少ナカルヘシト雖𪜈若シ確定前其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトアラハ十五年本省丙第七號達ニ依リ乙裁判所ニ於テ後犯ノ罪ト共ニ之ヲ判決スルコトヲ得ルハ見込ノ通此場合ニ於テハ甲裁判所ニ照會シ該書類ノ送致アルヲ俟テ書記ヨリ其書類ト共ニ被告人ノ差出セシ趣意書ヲ檢察官ヘ送致スヘキ者ト心得可シ

●京都始審裁判所檢事ヨリ司法警察官ニ於テ既決囚訊問ノ儀ニ付司法省ヘ請訓　十六年十一月廿六日

第一條　司法警察官ニ於テ現行準現行犯罪人ヲ訊問スルニ其共犯者他ノ犯罪ニ依リ現ニ既決監ニ在リ訊問ヲ要スル場合ニ於テハ別ニ令狀ヲ要セス司法警察官ヨリ該囚護送方ヲ監獄署ヘ照會シ監獄署ニ於テハ右照會書ニ依リ護送

ス可キ者ニ有之候哉將タ勾引狀ヲ發シ引致セシメ訊問ス可キ儀ニ可有之哉

第二條　司法警察官ニ於テ事實發見ノ爲メ既決囚ノ陳述ヲ聞カントスル時ハ該囚護送方監獄署ヘ照會ス可キモノニ有之候哉將タ報知書ヲ監獄署ヘ送致シ監獄署ニ於テハ其報知書ヲ本人ヘ下付シタル上無論護送ス可キモノニ可有之哉

右仰內訓候也

內訓　十六年十二月五日

第一條　後段見解之通

第二條　前段見解之通

長野縣令ヨリ治罪法疑義ノ件ニ付司法省ヘ請訓　十六年十二月四日

被告事件ニ付拘留狀ヲ以テ拘留中ノ者十日ヲ經過スルモ豫審判事ニ於テ收監狀ヲ不發又責付ヲモ不許依然打捨置キ候場合ニ於テハ司獄官吏ニ於テ被告人ヲ釋放ス可キヤ將タ發ス可キ令狀ヲ發セサル時治罪法第二百三十四條ノ規則ニ依リ被告人ニ於テ故障ヲ爲スヿヲ得ルニ止リ假令拘留狀期限ヨリ幾日經過スルモ依然拘束致置クヘキモノナルヤ疑義ヲ生シ候ニ付至急何分ノ御明示相成度此段及請訓候也

內訓　十六年十二月廿日

別紙請訓ノ趣豫審判事ニ於テ收監狀ヲ發セス又責付ヲ爲サヽル時ハ司獄官吏ヨリ檢事又ハ豫審判事ニ期限經過ノ旨ヲ通知ス可シ此旨及內訓候也

山形輕罪裁判所檢事ヨリ違警罪上告ノ儀ニ付司法省ヘ請訓　十六年十二月三日

違警罪上告ノ儀ニ付本年六月渡邊檢事長ヨリノ伺ニ對シ現行法律規則ニ依リ拘留科料ニ處スル者ト雖モ本刑ノ長期多數輕罪ノ範圍内ニ在ルモノハ上告ヲ爲スヿヲ得ヘシ但書ハ長短多寡數共全ク違警罪ノ範圍ニ在ルモノハ見込ノ通リト御內訓相成候處例ヘハ証劵印稅規則第四則第二條ニ該ルモノニシテ脫稅高壹錢ノ十倍若シクハ二十倍ノ科料金

拾錢或ハ二拾錢ニ處スヘキモノナルトキハ上告ヲ許サレサル儀ニ可有之哉又ハ其多數揭載ナキモ所犯ノ事實ニ依リ數百圓ニ至ルモノニ付全ク違警罪ノ範圍內ニ在ラサルモノト解釋致シ可然哉此段仰御內訓候也

內訓　十六年十二月廿一日

請訓ノ趣前段見解之通但脫稅多額ニシテ貳圓以上ノ罰金ニ該ル可キ者ナルトキハ上告ヲ爲スヿヲ得ヘシ

死刑ノ宣告ヲ受ケタル者病氣ノ節執行方疑義ノ廉群馬縣ヨリ司法省ヘ伺　十六年十二月四日

茲ニ死刑ヲ執行スヘキ者當時病痾窒扶斯或ハ腦膜炎ノ類ニ罹リ更ニ人事ヲ省ミサルカ如キ受刑者アラン此際直ニ執行ヲ爲スハ却テ刑罰ノ本旨ニ悖ヒ少シク妥當ナラサルヲ覺フ因テ右ノ場合ニ於テハ其執行ヲ停止シ假令痊治ニ至ラサルモ幾分ノ本復ヲ待チ執行スヘキ儀ト相心得可然哉法章上明文無之ニ付相伺候也

指令　十六年十二月廿四日

伺ノ趣死刑ノ執行ヲ受クヘキ者疾病ニ罹リ人事ヲ辨セサル時檢察官ニ於テ其執行ヲ爲スヘカラスト認メタルトキハ伺之通

但執行ヲ爲スニ差支ナキニ至リ之ヲ執行スルモ亦タ檢察官ノ指揮ニ依ル儀ト心得ヘシ

上訴期限ノ儀ニ付京都府ヨリ司法省ヘ伺　十六年十二月十七日

刑ノ執行停止ノ儀ニ付本年九月廿六日京都始審裁判所檢事請訓ニ對シ御訓示ノ次第モ有之候處右ニテハ當府ノ如キ大審院ト所在地ヲ異ニスル土地ニ在リテハ治罪法第四百三拾八條ニアル處ノ三日間ハ右宣渡書送達ノ時間中ニ已ニ經過シ被告人ニ送達スルヤ否直ニ刑ノ執行ヲセサルヲ得サルカ如キ場合アリテ甚タ不穩當ト相考候付テハ右御訓示ノ旨趣ハ大審院ノ宣渡ノ原裁判所等ニ着シ之レヲ被告人ニ送達ナリシ翌日ヨリ三日間ヲ經テ刑ヲ執行スヘキモノト相心得可然哉疑義ヲ生シ候ニ付何分ノ御指令相成度此段相伺候也

指令　十六年十二月廿八日

伺ノ趣上訴ハ大審院宣渡ノ翌日ヨリ起算スヘキニ付本人ヨリ同院ヘ代言人ヲ差出シ置クカ又ハ重罪事件ニ係リ

同院ヨリ其代言人ヲ撰任セシ場合ニ非サレハ之ヲ為スヿヲ得サルモノトス

●證據物品處分方之儀ニ付樺戸集治監ヨリ司法省ヘ伺　十六年十二月五日

第一條　已決囚徒入監ノ節所持ノ物品ヲ情願ニ任セ司獄官吏ヨリ他ニ賣却シタル後餘罪發覺シ右物品ハ嚢ニ犯罪ノ用ニ供シタルモノナル時ハ其公商公賣ニアラサルモノ之ヲ買取ルト雖モ沒收スルノ限ニ無之候哉

第二條　總テ證據物品裁判所ノ管轄地外ニアルトキハ其管轄裁判所ニ囑托シ送付ヲ求メ可然哉又其送付費用ハ何レノ裁判所ニテ支辨レ可然哉

第三條　前條送付シタル物品裁判濟ノ上還付ノ言渡ヲ為シタル時其言渡ヲ受クル者裁判所ノ管轄地外ニ在ルトキハ其所轄裁判所ヘ囑託シ還送致可然哉果シテ然ラハ其運送費ハ何レノ裁判所ヨリ支辨ス可キ儀ニ候哉

右相伺候條至急御裁令相成度候也

指令　十七年一月十一日

第一條　見込ノ通

第二條　治罪法第六十一條ニ從ヒ司法警察官撿察官又ハ裁判官ニ囑託スルヿヲ得但送付費用ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨ス可キモノトス

第三條　囑託ヲ為ス迄ノ運送費ハ其官署ニ於テ支辨シ囑託ヲ為シタル以後ノ運送費ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨ス可シ

●租稅官吏職務上家宅搜查ノ儀ニ付長崎縣ヨリ司法省ヘ伺（電報）　十七年一月十日

客年第四十三號公布ニヨリ主任官吏犯則ノ證憑取調ルトキ本人拒ムトモ家宅倉庫ヲ搜查スルノ權アリヤ

指令　十七年一月十四日

客年第四十三號公布ニ依リ家宅倉庫搜查ノ件ハ伺ノ通

●大坂控訴裁判所撿事ヨリ豫審終結ノ條項ニ付司法省ヘ請訓　十六年十二月十日

凡ソ公訴ノ豫審タルヤ毎常極メテ難獄疑獄ニ係リ務メテ鄭重愼密ヲ旨トシ要スルニ被告事件ノ證據徵憑ヲ集取シ以テ充分ノ證憑アルヤ否ヲ判決スルノ一點ニ外ナラス然リ而シテ其集取シタル數個ノ證憑中必スヤ信否取捨一ナラスシテ之レカ判決ヲ與フルヤ精確ニ心證ノ資料ヲ擇ラヒ事實ノ眞據ヲ明カニシ判決ノ理由ヲ示シ以テ裁判ノ公平無偏ヲ保チ須ラク證憑曖昧ノ間ニ事實ヲ誤リ無辜ノ民ヲシテ不幸ノ害ニ陷ラシメサルヲ要ス可キ者タルヤ言ヲ俟タス然ルニ當廳所轄ノ各裁判所ニ於テ間ニハ豫審ノ言渡書中證憑ノ事項ヲ明示セス單ニ證憑充分トノミ略記スル者有之是等ハ何ノ證憑ニ依テ充分ナリト判定シタルヤ漠然トシテ其必信ノ證據更ニ知了スルニ由ナク乃チ撿察官ニ於テハ犯罪ヲ證明スルノ資料ヲ擇フニ煩ハシク被告人ニ於テハ自護ノ反證ヲ照考スルノ便ヲ缺キ被告人ノ幸不幸ヲ來タス而已ナラス公衆ノ危險モ亦尠ナシトセス旁々不都合ヲ生スルヲ覺フ抑モ治罪法第二百二十八條末項ニ違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ為スニハ犯罪ノ性質状樣證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シト有之夫レ本條ノ精神タルヤ證憑ノ充分ナルヿヲ明示スル最モ緊要點ニシテ所謂證憑充分ナルヿヲ明示ストハ決シテ證憑充分トノミ單示スルノ謂ニ非ラスシテ必ス證憑ノ事項ヲ明確ニ臚列明示スルノ謂ニ外ナラサル可シ茲ニ當廳ノ所轄中ニ於テ過半ハ本議同感ノ者有之ト雖ニ三ノ裁判所ニ在テ前顯ノ如キ證憑畧記ノ判文ヲ用ヒ反テ簡便ニシテ適法ナリト主張スルモ有之是レ必竟法律ノ見解ヲ異ニシ且手續ノ鄭重簡易ノ兩主義互ニ相背馳スルニ之レ職由セン固ヨリ當廳ニ於テハ一同本議ニ異論無之ト雖モ他ノ各裁判所ニ在テハ議論異同有之抑亦豫審判事ノ判決ニ於テ證憑ノ取舍信否ノ異同之レ有ルハ格別ナルモ判決ノ言渡書ニ其心證ノ資料即チ豫審ノ必要タル證憑ノ事項ヲ明示スルト否ラサルトノ異同有之一定ノ制規無之ハ頗ル不都合ト謂ハサルヲ得ス倘シ或ハ謂ハン是等ノ異同有ルモ法律上敢テ妨ケナシトシ猶ホ各自ノ意見ニ放任シ去ラハ恐クハ豫審ノ處分自然荒疎ニ傾キ泛濫ニ流レ如何ナル弊害ヲ生センモ難測就テハ假令法律上明文アルニ非ラスト謂フモ前顯通治罪法第二百二十八條末項ノ精神ニ繹ヌルニ必ス證憑ノ事項ヲ明示スルヲ以テ元則トセン最モ實際ノ利害ニ試ミ以テ本議ヲ是認セサルヲ得ス就テハ前陳ノ如ク議論兩岐ニ渉リ終結一定致サヽル義ニ付御內訓ヲ仰キ候條何分御垂示被成下度此段稟請候也

内訓　十六年十二月廿八日
諭訓ノ趣豫審ノ言渡書ト公判ノ言渡書トハ自然其趣ヲ異ニスル者ニ付キ治罪法第二百二十八條末項ニ定メタル言渡書ハ犯罪ノ性質状様ノ如キハ成ル可ク明白ニ記載スルヲ要ス可シト雖モ証憑ニ至テハ一々明示スルニ及ハス其證憑ノ充分ナルヿヲ記載スルヲ以テ足レリトス此旨及内訓候也

● 秋田始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ附帶私訴之儀ニ付請訓　十七年三月七日

詐欺取財事件ニ付甲裁判所ニ於テ公訴私訴ヲ併セテ裁判ヲナシタル處被告ハ其裁判ニ不服シテ上告ヲナシタリ然ルニ大審院ニ於テハ法律ニ依リ理由ヲ付セサリシハ不法ナリトシ其全部ヲ破毀シ更ニ乙裁判所ニ移サレタルヲ以テ乙裁判所ハ本按詐欺取財事件ニ付テハ公訴私訴併セテ適當ノ判決ヲナササルヘカラサルハ論ヲ俟タサル義ト被相考如何トナレハ原裁判ノ全部ヲ破毀セラルレハ即原裁判ノ無効ニ屬スルヲ以テナリ然ルニ反對ノ論者アリ大審院ニ於テ原裁判ノ全部ヲ破毀シタルハ刑事ノ公訴ニ對スル裁判ノミニシテ私訴ニ及サルモノナレハ乙裁判所ハ刑事ノ公訴ニ對スル判決ヲ爲スニ止マリ私訴ノ裁判ヲ與フルノ限リニアラサル旨主張スト雖モ刑事ニ附帶シテ刑事裁判所ニ私訴ヲナシタル場合ハ即本按裁判ノ無効ニ屬セハ隨テ從タル附帶ノ私訴モ効力ヲ失スルハ當然ナルヲ以テ乙裁判所ハ大審院ノ破毀ニ係ル公訴私訴ヲ併セ判決ヲナスハ至當ト存候得共爲念御内訓ヲ仰候也
但シ被告等カ上告ノ當時ハ殊更私訴ノ裁判ニ對シ何等申立サル義ニ付御參考迄申添候也

内訓　十七年三月廿四日
諭訓ノ趣ハ乙裁判所ニ於テ更ニ私訴ノ裁判ヲ爲スニ及ハス此旨及内訓候也

● 重罪被告人ニ對スル接見願ニ付大坂控訴裁判所檢事ヨリ司法省ヘ伺　十七年三月十日

重罪被告事件ニ付豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ治罪法第二百二十七條ニ從ヒ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置シ檢事ニ於テハ右言渡確定シタル時ハ治罪法第二百六十條ニ從ヒ其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ニ於テハ重罪裁判所開廳ノ期ニ至リ治罪法第六十條第二項ニ從ヒ被告人ヲ其重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命スルノ手續ニ有之處茲ニ豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ確定ノ上檢事ヨリ書類ヲ檢事長ニ送致シ未タ重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラスシテ被告人ハ仍ホ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ留置中其親屬等被告人ト面接願ヲ申請シタル者アランニ治罪法第三百八十二條第三項ニ依ルニ辯護人ヲ除クノ外何人ト雖重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラスト有之就テハ右但書ニ被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長トアルハ譬ヘハ前掲ノ如ク豫審ノ言渡確定スルモ未タ管轄重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラス單ニ書類ノミ檢事長ニ送致シ被告人ハ猶ホ原裁判所管内ノ監倉ニ留置ノ場合ニ在テハ原裁判所即チ豫審ヲ爲シタル輕罪裁判所長ノ允許ヲ受クル儀ナルヤ果シテ然ラハ該裁判所長ニ在テハ固ヨリ其管掌ニ屬セサル事件而已ナラス其被告事件ノ何タルヤ未タ曾テ與カリ知ラスシテ且ツ書類モ既ニ檢事長ニ送致シアル者ナレハ該裁判所長ニ於テハ之ヲ許否スルニ由ナキ者ト思考セリ又未タ重罪裁判所開廳ノ期ニ至ラサルモ檢事長ノ指揮ニ依リ豫テ被告人ヲ其開廳ス可キ重罪裁判所ノ下ニ在ル監倉ニ移シ留置シ猶ホ未タ重罪裁判所開廳セサル場合ハ何レノ裁判所長ニ於テ之レカ允許ヲ得ル儀ニ有之哉若クハ猶ホ原裁判所即チ輕罪裁判所長ノ允許ヲ受ルノ手續ナル哉

指令　十七年三月廿五日
伺ノ趣被告人豫審ヲ受ケタル裁判所附ノ監倉ニ在ル時ハ其裁判所長ノ允許ヲ受ケ已ニ開廳スヘキ重罪裁判所附ノ監倉ニ移シタル時ハ其開廳スヘキ始審又ハ控訴裁判所長ノ允許ヲ受クル儀ト心得可シ

● 官吏ノ職務ニ對シ文書ヲ送致シテ侮辱スル者ノ儀ニ付山形始審裁判所酒田支廳檢事ヨリ司法省ヘ伺　十七年三月十二日

官吏ノ職務ニ關シ文書ヲ直チニ其官吏ニ送致シ以テ侮辱シタル者法律ニ明文無之候處右ハ筆記セシ言語ナリトシ又直接之ヲ送致シタルヲ以テ目前ニ於テ爲セルト同一ナリトスル時ハ刑法第百四十一條初項ヲ以テ論ス可シト雖𪜈已ニ紙上ニ移シタル上ハ即文書ノ名ヲ命ス可クシテ之ヲ言語ト云フ可カラス又假令直接之ヲ送致スルモ其身全ク外ニ

在レハ之ヲ目前ノ所爲ト云フ可カラサレハ該項ニ依ル可キモノニ非サル可シ然ルニ同條ノ次項ナル其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書ヲ以テ誹毀スト云ヘル其刊行ノ文字ハ即印刷發行ノ二事ニシテ必ス印刷シテ以テ世上ニ公行スルモノヲ云フカ如クナリト雖モ文書ハ必スシモ印刷ヲ要セス手書シタルモノモ亦之ニ含蓄セハ又必スシモ廣ク世上ニ發行スルモノヽミナラス直ニ其官吏ニ送致スル者モ亦含蓄シタルモノニシテ該項ニ依リ論ス可キモノニ候哉又ハ假令其官吏ニ送致スルモ唯双方間ニ在ルノミニシテ他人ニ漏泄セサルモノナレハ該項ニ含蓄セス到底刑法第二條ニ依リ論スルヿヲ得サル儀ニ候哉

指令　十七年三月廿八日

伺ノ趣刑法第百四十一條第一項ニ依リ處分スル儀ト心得ヘシ

秋田始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ控訴ノ儀ニ付請訓　十七年四月二日

玆ニ告訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲シタル被告事件アリ裁判官其公訴ヲ裁判シタル後私訴ノ裁判ヲ爲スニ當リ檢察官ニ通報ヲ爲サヽル故同官ノ立會ナクシテ私訴ノ裁判ヲ言渡シタリ此即チ治罪法第三十五條ノ法典ニ背キタルヲ以テ檢察官ニ於テ同法第三百六十五條第四項越權ノ處置アルヲ理由トシ控訴ヲ爲シ得ルハ勿論ト存候得共同法第三百六十五條第四項ハ刑ノ言渡ニ關シ越權等ノ處分アリタル場合ニ限リ適用スヘキモノニシテ檢察官カ刑事附帶ノ私訴裁判言渡ニ對シ控訴スルカ如キハ本項ノ規定スル所ニアラスト云フ反對論者アリ聊カ疑義ニ渉リ乞御內訓候也

內訓　十七年四月十七日

請訓ノ趣ハ後段解釋ノ通此旨及內訓候也

大審院檢事長ヨリ司法省ヘ死者ニ對スル再審ノ訴ニ付請訓　十七年四月十五日

治罪法第四百四十條第五ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬ヨリ再審ノ訴ヲナシ得ヘキ旨ヲ規定セラレ其第四百四十六條ニ於テハ死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲナシタル場合ニ於テ云々ト記載シアツテ檢察官ヨリ再審ノ訴ヲ起シタル場合ノ規定アルヿナケレハ該文面上ヨリ之レヲ見ルトキハ死者ニ對スル再審ノ訴ハ其親屬ニ非サレハナシ得ヘカラサル者ノ如ク解釋セラレ候得共既ニ其親屬ニ於テ訴權ヲ有スル以上ハ檢察官ニ於テモ訴權ヲ有スルノ道理ナレハ聊カ疑義ニ渉リ相決シ兼候ニ付御內訓ヲ仰キ候也

內訓　十七年四月二十一日

請訓之趣檢察官ニ於テモ再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ儀ト心得可シ此旨及內訓候也

岡山始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ他ノ裁判所ヘ移サレタル被告人送致ノ手續及保釋取消等ノ儀ニ付請訓　十七年四月十日

第一條　甲裁判所ノ重罪公判ニ對シ上告ヲナシ大審院ニ於テ之ヲ破毀シ乙裁判所ニ移サレタル時ノ場合被告事件一切ノ書類ヲ送致スヘキ手續別段ノ正條ナキヲ以テ或ハ甲裁判所ヨリ直チニ其移サレタル乙裁判所ノ管轄檢事長ヘ送致スルモアリ或ハ乙裁判所ノ檢事ヘ被告人ト共ニ送致シ乙裁判所ノ檢事ニ於テ更ニ治罪法第二百六十條ノ例ニ原キ其控訴裁判所檢事長ヘ送致スルモアリ其取扱區々ニ有之輕罪ニ於テハ原裁判所ヨリ直チニ其移サレタル裁判所ヘ送致スルヲ以テ例トナスモ重罪事件ニ於テハ必ス檢事長ヲ經サルヘカラサルモノニ付何レノ手續ニ從フヘキヤ前說ノ如キハ其管轄ニアラサル裁判所ヨリ他ノ管轄ノ檢事長ヘ送致スルハ或ハ事ノ順序ヲ逐ハサルモノヽ如シ然ラハ後說ノ手續ニ從フヲ以テ穩當トナス乎

第二條　輕罪事件上告中被告人ヲ保釋又ハ責付シタル場合破毀ノ上他ノ裁判所ニ移サレタルトキハ其責付保釋ハ當然取消ヘタルモノトシ更ニ勾留ノ上一件書類ト共ニ送致スヘキモノナル哉

右仰御內訓候也

內訓　十七年五月十日

請訓ノ趣第一條ハ甲裁判所檢察官ヨリ直ニ乙裁判所ヲ開ク可キ裁判所ノ檢察官ニ送致ス可シ第二條原裁判所ニ於テ保釋責付ノ取消ヲ必要トスルトキハ之ヲ取消スハ勿論ナレ𪜈當然取消シタル者ト爲スヿヲ得ス

輕罪控訴期限ノ儀ニ付神戸始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ請訓（電報）　十八年一月八日

刑事控訴期限ハ五日ナルニ付キ第貳號布告御發令前刑ノ言渡ヲ受ケ五日ヲ經過セサルモノモ控訴スルコトヲ得ルヤ

直ク御指揮ヲ仰ク

内訓（電報）　十八年一月十四日

一月八日付電報請訓ノ趣本年第貳號布告施行前刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ上告期限ヲ經過セサルトキハ期限内ニ控訴スルヲ得ヘシ

●控訴ニ係ル裁判執行ノ儀ニ付松山始審裁判所檢事ヨリ司法省ヘ伺　十八年一月二十七日

本年第貳號布告ヲ以テ輕罪ノ控訴ヲ許サレ隨テ同布告第三條第四條ニ規定セラル、保納金ノ處措ヲ按スルニ當リ先ツ控訴ニ係ル裁判ノ執行ハ何レノ裁判所ニ於テナスヘキヤヲ決スルノ要アルヲ知レリ玆ニ至テ論議ニ派ニ出テ即甲論者ハ凡ソ刑ノ執行ハ治罪法第四百六拾貳條ニ定メラル、如ク原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ爲スヘキモノニシテ控訴裁判所ニ對スル原裁判所ハ即チ始審裁判所ナリ故ニ控訴裁判ノ執行ハ原裁判所即チ始審裁判所ニ於テナスヘキモノナリ然ラサレハ控訴ハ時アリテ原裁判ヲ認可スル場合アルノミナラス彼ノ保納金ヲ收領スルハ無論原裁判所即チ始審裁判所タラサルヘカラス加之治罪法第四百六拾貳條ハ如何ナル時ト雖モ總テ刑ノ執行ヲナスヘキ場合ヲ定メラレタルモノニシテ汎キ意義ナルニ依リ特リ大審院ニ對スル原裁判所ニアラスシテ始審ノ控訴ニ於ルモ原裁判所即チ始審裁判所ニ於テ執行ヲナスヘキモノナリト乙論者ハ之ニ反シ治罪法第四百六拾貳條ノ原裁判所トハ必竟大審院ニ對スル原裁判所ニシテ控訴裁判所モ亦同院ニ對シテハ即チ原裁判所ナリ何トナレハ控訴裁判ニ對シテ上告ヲナシ大審院ニ於テ棄却又ハ直ニ裁判ノアリシ時ハ控訴裁判所ニ於テ刑ノ執行ヲナスヘキハ勿論ナレハナリ本來刑ノ執行ヲ原裁判所ニ於テ爲スヲ必要ナリトセシ所以ノモノハ上告ノ際大審院ニ於テ棄却シ又ハ直ニ裁判アリシ時同院ニ於テ執行ノ煩ヲ取ラサルヲ要スレハナリ如何トナレハ上告ハ罰金ノ刑ヲ除ノ外ハ悉ク被告人ヲ其院ニ送ラス只辯護人ヲ出スニ止マレハナリ之ニ反シテ控訴ハ必ス被告人ヲ其裁判所ニ護送シ事實ノ覆審ヲナスヘキニ依リ直ニ刑ノ執行ヲナスニモ毫モ差閊ナキノミナラス却テ被告人ヲ送還スルノ勞費ナク將タ逃走ノ患ナクシテ實際上大ニ便利ナリト云フヘシ彼ノ保納金ノ如キハ只之ヲ郵送スルノ手數ヲ要スルノミ現ニ被告人ノ其地ニアリテ執行上更ニ支障ナキニモ拘ハラス故ラ送還スル等甚タ迂濶ナル手續ヲナスカ如キノ比ニアラサルナリ加フルニ控訴裁判所ヨリ被告人ヲ原裁判所即チ始審裁判所ヘ送リ還スカ如キハ路程ノ遼遠行路ノ嶮難ナル場所ニ在テハ又一層ノ不便ヲ感スル所ナリ依テ控訴ニ係ル裁判ノ執行ハ大審院ノ裁判ト異ニシテ直ニ控訴裁判所ニ於テ執行スヘキモノナリト以上兩論ノ派ル、所ニ有之候處小官ハ全ク乙論者ノ説ト同一ノ意見ヲ持スルモノニシテ治罪法第四百六拾貳條ノ原裁判所トハ即チ大審院ニ對スル原裁判所ニシテ始審ノ控訴ニ於ルカ如キモノヲ指ス律意ニ非ストス法律ノ見解既ニ此ノ如シ實際上ノ便益モ亦前述ノ如ク然リ旁控訴裁判所ニ於テ直チニ執行スヘキモノト思量致候得共又治罪法第四百六拾貳條ハ實際ノ便否ニ拘ハラス所謂原裁判所トハ特リ大審院ニ對スル場合ナルノミナラス或ハ控訴裁判所ニ對スル場合ヲモ包含スルヤ

指令　十八年二月二十四日

伺ノ趣控訴ノ裁判言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ執行スル儀ト心得可シ

●沿革要領

明治元年二月五日刑法事務局ヲ置ク○同年閏四月廿七日布告ヲ以テ刑法事務局ヲ廢シテ刑法官ヲ置ク○同年十一月十八日布告ヲ以テ御誕辰ノ日ハ刑罰拷問等ヲ除カシム○二年七月八日官制ヲ改定シ刑法官ヲ廢シテ刑部省ヲ置ク○同年十一月五日刑部省中逮部司ヲ置キ捕亡ノ事務ヲ掌ラシム○四年七月九日刑部省ヲ廢シ司法省ヲ置キ聽斷ノ事務ヲ管セシム○五年十月司法省第廿五號布達ヲ以テ白洲上等昇ノ分界ヲ廢ス○同年十一月司法省第四十五號達ヲ以テ罪按書式及凡例ヲ頒布ス○六年一月司法省第八號達ヲ以テ罪按凡例二十四條ヲ改正ス○同年三月司法省第三十二號布達ヲ以テ除刑罰拷問ノ日ヲ更定ス○七年一月第十四號達ヲ以テ檢事職制章程司法警察規則ヲ定ム○同年九月第百廿八號達ヲ以テ司法警察規則附錄ヲ定ム○同年十月第百三十二號達ヲ以テ司法警察ノ事務ヲ當分使府縣ヘ委任ス○八年五月四日檢事職制章程ヲ定ム○同月第九十一號布告ヲ以テ巡回裁判規則ヲ定ム○同月第九十三號布告ヲ以テ刑事上告手續ヲ定ム○同年六月第百三號布告ヲ以テ裁判事務心得ヲ定ム○九年四月第三十九號達ヲ以テ七年第十四號達司法警察規則ヲ廢

ス○同月司法省達第四十七號達ヲ以テ糺問判事職務假規則ヲ定ム○同月司法省達第四十八號達ヲ以テ司法警察假規則ヲ定ム○同年六月第八十六號布告ヲ以テ凡ソ罪ヲ斷スルハ證ニ據ラシム○十年二月第十七號布告ヲ以テ保釋條例ヲ定ム○同月第十九號布告ヲ以テ八年第九十三號布告刑事上告手續ヲ改正ス○同第廿二號布告ヲ以テ警察官變死者ノ屍ヲ解剖撿查スルヲ許ス○同年三月第三十二號達ヲ以テ撿事職制章程ヲ定ム○同年七月第四十九號布告ヲ以テ民刑事ヲ上告シテ已ニ裁判ヲ經タル者司法卿ニ於テ不當ト思量スルトキハ撿事ヲシテ再審ヲ求メシム○十二年十月第十二號布告ヲ以テ拷訊ニ關スル法例ヲ廢ス○十三年七月第三十七號布告ヲ以テ治罪法ヲ創定ス○同年第四十六號達ヲ以テ司法警察ノ事務委任ノ際自今司法省ノ都合ニヨリ漸次各地ニ撿事ヲ置キ撿事ニ屬スル事務ハ追々地方官ヨリ引受ケシム

○

【第百八十四】 陸軍省所管ノ軍人軍屬脫走之者捕縛遞送方 明治五年六月二十九日

第百九拾五號布告

陸軍省所管ノ軍人軍屬脫走之者各府縣ニ於テ見當リ候ハヽ致捕縛府縣送リヲ以テ其地方所管ノ鎭臺本營或ハ分營ヘ護送可致候此旨相達候事

○

【第百八十五】 司法警察規則附錄ヲ定ム 明治七年九月二十九日 第百貳拾八號使府縣ヘ達

本年一月第拾四號ヲ以テ相達候司法警察規則附錄別紙之通相定候條此旨相達候事

（別紙）

司法警察規則附錄

外國公使及ヒ公使館屬員ノ事

第一條 外國公使ハ我國法ヲ以テ羈縻スヘカラサル通義ナレハ是ヲ擴充スル時ハ其家屬並ニ公使館屬員書記官附屬員公使ノ僕隷書記官ノ家族及ヒ書記官ノ僕隷等總テ公使館ノ名籍ニアル者ヲ云フ及ヒ其家屋車馬迄モ同様ナリト思量スヘシ

第二條 內國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ傭ハレ公使館ノ名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬隷ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサルヲ得サルカ或ハ呼出シテ糺問セサルヲ得サル時ハ外務省ヲ歷テ公使館ヘ報知シ其唯諾ヲ待チテ後引出スヘシ尤其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラス

第三條 內國人各公使館及書記官ニ傭ハレ中ハ其公使又ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ屆出外務省ハ其屆書ヲ速ニ司法警察官吏ヘ送遞シ置ヘシ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置ヘシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在ル處ヲ問糺ス時公使館ニ傭ハレ中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ遂ケタル後其處分ヲ施スヘシ若其姓名簿記中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館ヘ同道シ右ノ如ク處置スヘシ

但シ重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條 外國公使館內ハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ルヘカラス若シ重

科ヲ犯シタル罪人ト見留タル者奔逃シテ門内ヘ闖入セシ等毫髮ノ間モ猶豫スヘカラサル時ハ其把門者ニ告ケ其館主ノ許可ヲ受ケテ後館内又ハ邸内ヲ探索スヘシ

第五條　右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論車馬家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合セ而シテ其處分ヲ爲スヘシ

外國公使屬員罪ヲ犯シ並犯罪ノ内國人公使館ニ住居スル時ノ事

第六條　外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火強姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行ヲ見及フカ或ハ現ニ見スト雖モ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシカタキ時ハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申スヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可ラス或ハ屬員ノ内國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼レヨリ引渡ヲ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申ヘシ

第七條　犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其罪科ノ知レタル内國人現ニ公使館内ニ備ハレテ公使館ニ住居スル時ハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會ヲ乞館主ニ引渡シヲ要求シ其人ヲ受取リテ後之ヲ捕縛ス可シ若シ館主之ヲ拒ムトキハ其旨ヲ猶外務省ヘ報知シテ其處分ヲ定ム可シ

第十九類　罰則

第百八十六　法律規則中罰例ニ係ルモノ處斷例　明治十四年十二月二十八日 第七拾貳號布告

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰例ニ係ルモノハ左ノ例ニ照シテ處斷スヘシ

第一條　凡懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第二條　凡禁獄及禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第三條　凡罰金及科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未滿ヲ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四條　法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ咎可申付トアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條　法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第六條　法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依テ處斷ス

第七條　前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スル者ト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得

右奉　勅旨布告候事

○諸罰則ヲ犯シ罰金科料ニ處セラルヽ者處分法　明治十三年三月三十一日 第拾壹號布告

諸罰則ヲ犯シ罰金科料ニ處セラルヽ者處分法左ノ通相定候條此旨布告候事

一罰金科料ハ宣告ノ日ヨリ一月内ニ納完セシム若シ限内納完セサル者ハ壹圓ヲ一日ニ折算シ禁獄ニ換フ其壹圓以下ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

但算シテ禁獄二年以上ニ及ホスヲ得ス

一禁獄限内罰金科料ヲ納完シ又ハ親屬等代テ納完スル時ハ經過シタル日數ヲ扣除シテ禁獄ヲ免ス

一罰金科料ノ實決ノ刑ニ併科シタル時完納セサル者ハ刑期滿限ノ後例ニ照シテ禁獄ス

○諸罰則ヲ見屆ケ訴出ル者科料罰金ノ半高給與方 明治十三年三月二十日 司法省丙第壹號大審院諸裁判所檢事檢事補ヲ置カサル府縣ヘ達

諸罰則中違犯者ヲ見屆ケ訴出ル者ハ其賞トシテ科料又ハ罰金ノ半高ヲ給付スト之レアルハ其違犯者無力ニシテ科料又ハ罰金ノ全部ヲ完納スル能ハサルトキハ實地徴收セシ金高ノ半額ヲ給付スル儀ト心得ヘク此旨相達候事

但シ本文ニ抵觸セル從前ノ伺指令ハ總テ取消候事

○

第百八十七 讒謗律 明治八年六月二十八日 第百拾號布告

讒謗律別冊之通被定候條此旨布告候事

（別冊）

讒謗律

刑法第百十七條第百十九條第百二十條及第三百五十五條乃至第三百六十一條ニ依リ取捨スヘシ

第一條 凡ソ事實ノ有無ヲ論セス人ノ榮譽ヲ害スヘキノ行事ヲ摘發公布スル者之ヲ讒毀トス人ノ行事ヲ擧ルニ非スシテ惡名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著作文書若クハ畫圖肖像ヲ用ヒ展觀シ若クハ發賣シ若クハ貼示シテ人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下ノ條別ニ從テ罪ヲ科ス

第二條 第一條ノ所爲ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ渉ル者ハ禁獄三月以上三年以下罰金五十圓以上千圓以下 二罰ヲ併セ科シ或ハ偏ヘニ一罰ヲ科ス以下之ニ倣ヘ

第三條 皇族ヲ犯スニ渉ル者ハ禁獄十五日以上二年半以下罰金十五圓以上七百圓以下

第四條 官吏ノ職務ニ關シ讒毀スル者ハ禁獄十日以上二年以下罰金十圓以上五百圓以下誹謗スル者ハ禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下

第五條 華士族平民ニ對スルヲ論セス讒毀スル者ハ禁獄七日以上一年半以下罰金五圓以上三百圓以下誹謗スル者ハ罰金三圓以上百圓以下

第六條 法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向テ罪犯ヲ告發シ若クハ證スル者ハ第一條ノ例ニアラス其ノ故造誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル

第七條 若シ讒毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ルヽ者檢官ヨリ其事ヲ糾治スルカ若クハ讒毀スル者ヨリ檢官若クハ法官ニ告發シタル時ハ讒毀ノ罪ヲ治ムルヿヲ中止シ以テ事案ノ決ヲ俟チ其ノ被告人罪ニ坐スル時ハ讒毀ノ罪ヲ論セス

若シ事刑法ニ觸レスシテ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者ハ讒毀スルノ後官ニ告發スト雖モ仍ホ

誣毀ノ罪ヲ治ム

第八條　凡ソ誣毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被害ノ官民自ラ告ルヲ待テ乃チ論ス

第二十類　雜

第百八十八　一聖一元ノ詔書　明治元年九月八日布告

今般御即位御大禮被爲濟先例之通被爲改年號候就而ハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ屢改號有之候得共自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被仰出候事

詔書

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準也朕雖否德幸頼祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元欲與海內億兆更始一新其改慶應四年爲明治元年自今以後革易舊制一世一元以爲永式主者施行

戊辰九月八日

○

第百八十九　暦　明治五年十一月九日第三百三十七號布告

今般改暦之儀別紙詔書ノ通被仰出候條此旨相達候事

（別紙詔書）

朕惟フニ我邦通行ノ暦タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ太陽ノ躔度ニ合ス故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晩アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率テ妄誕無稽ニ屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス蓋シ太陽暦ハ

太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異アリト雖モ季候早晩ノ變ナク四歲每ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟サルナリ依テ自今舊曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ

一今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事

但新曆鏤板出來次第頒布候事

一一ヶ年三百六十五日十二ヶ月ニ分チ四年每ニ一日ノ閏ヲ置候事

一時刻ノ儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分チ候處今後改テ時辰儀時刻晝夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ午前幾時ト稱シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ午後幾時ト稱候事

一時鐘ノ儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候處以後何時ト可稱事

一諸祭典等舊曆月日ヲ新曆月日ニ相當シ施行可致事

（新舊曆日比較及時刻表ハ畧之）

○頒曆及略曆出版　明治十五年四月廿六日　第八號布達

本曆幷略本曆ハ明治十六年曆ヨリ伊勢神宮ニ於テ頒布セシムヘシ

八年第百三十五號布告ヲ以テ出版條例ヲ定ム〔第六十六〕

一枚摺略曆ハ明治十六年曆ヨリ何人ニ限ラス出版條例ニ準據シ出版スルコトヲ得

但明治九年十月內務省甲第三拾九號布達ハ取消ス

右布達候事

●沿革要領

明治三年二月十日天文曆道ヲ大學ノ管轄ト爲ス○同年四月廿二日布告ヲ以テ頒曆授時ノ儀ハ至重ノ典章ニ候間自今弘曆者ノ外取扱ノ儀嚴禁仰出サル○四年七月十八日布告ヲ以テ大學ヲ廢シ文部省ヲ置ク○同年八月七日達ヲ以テ文部省職制ヲ定ム○五年十一月第三百六十一號布告ヲ以テ來明治六年ニ限リ各地方ニ於テ略曆版刻販賣ヲ許シ太陽曆ヲ標準トシ不稽ノ說ヲ加フルヲ禁シ且管廳ノ許可ヲ受ケシム○同月第三百六十二號ヲ以テ第三百六十一號布告ニ據リ略曆出版出願ノ者アルトキ太陽曆ニ照シ撿査ノ上許可セシムヘキ旨ヲ府縣ヘ達ス○六年一月第二十號ヲ以テ五年第三百六十一號第三百六十二號布告ノ略曆トハ柱曆ノ類ニシテ一枚摺ノ品ニ有之旨ヲ府縣ヘ達ス○九年二月廿四日達ヲ以テ文部省管理編曆ノ事務ヲ內務省ニ屬ス○同年十月內務省甲第三十九號布達ヲ以テ來明治十年曆ヨリ本略曆共印紙ヲ貼用セシメ略曆出版ノ儀ハ府縣廳ヲ經テ內務省ヘ出願許可ヲ受ケシメ無印紙ノ曆ハ賣買ヲ禁ス○十五年四月第八號布達ヲ以テ九年內務省甲第三十九號布達ヲ廢シ本曆並略本曆ハ十六年曆ヨリ伊勢神宮ニ於テ頒布セシメ一枚摺略曆ハ何人ニ限ラス出版條例ニ準據シ出版スルヿヲ得セシム

○

【第百九十】華族令　明治十七年七月七日　宮內省無號華族一般ヘ達

華族令左ノ通被　仰出候ニ付此旨相達候事

奉　勅

華族令

第一條　凡ソ爵ヲ授クルハ　勅旨ヲ以テシ宮內卿之ヲ奉行ス
第二條　爵ヲ分テ公侯伯子男ノ五等トス
第三條　爵ハ男子嫡長ノ順序ニ依リ之ヲ襲カシム女子ハ爵ヲ襲クコトヲ得ス但現在女戶主ノ華族ハ將來相續ノ男子ヲ定ムルトキニ於テ親戚中同族ノ者ノ連署ヲ以テ宮內卿ヲ經由シ授爵ヲ請願スヘシ
第四條　嗣今有爵者又ハ戶主死亡ノ後男子ノ相續スヘキ者ナキトキハ華族ノ榮典ヲ失フヘシ
第五條　有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及ヒ名稱ヲ享ク
第六條　華族戶主ノ戶籍ニ屬スル祖父母、父母及妻及嫡長子孫及其妻ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク
第七條　本人生存中相續人ヲシテ爵ヲ襲カシムルコトヲ得ス
　但刑法又ハ懲戒ノ處分ニ由リ爵ヲ奪ヒ又ハ族籍ヲ削ラレ更ニ特旨ヲ以テ相續人ニ授クル者ハ此例ニ在ラス
第八條　華族ノ戶籍及身分ハ宮內卿之ヲ管掌ス
第九條　華族及華族ノ子弟婚姻シ又ハ養子セントスル者ハ先ツ宮內卿ノ許可ヲ受クヘシ
第十條　華族ハ其子弟ヲシテ相當ノ教育ヲ受ケシムルノ義務ヲ負フヘシ

○

【第百九十二】證人並無罪解放ノ者等ノ旅費日當支給方　明治九年五月四日第六拾三號布告

明治七年七月第七拾八號同年十一月第百二十七號同八年五月第七十四號布告及同七年七月第九十一號同年十一月第百五十八號達ヲ廢シ証人並無罪解放ノ者等ノ旅費支給方ノ儀今般更ニ左之通相定當五月十六日ヨリ施行候條此旨布告候事

一罪囚ノ証人タルヘキト思量シ裁判官又ハ警察官吏ニ於テ呼出ス者探索上ニテ捕ニ就キ及呼出ヲ受テ無罪ニ歸スル者人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者（各官廳ヨリ呼出ス者モ同シ　九年第百三十二號布告ヲ以テ(裁判官)ノ下六字ヲ增補シ(及)ノ下三字ヲ刪除ス）有罪ト認メ呼出サル、者ヘ附添ヲ命スル者往復並滯留中左ノ通支給スヘシ
　但推糺ノ爲メ手鎖繩付等ニテ護送及檻倉入圄中等官費ヲ以仕貯ノ時日ハ別ニ給セス

旅費日當　金五拾錢
滯留日當　金三拾錢

一該廳ヨリ片道二里以上十里迄ハ旅費日當一日分ヲ給シ爾餘一日十里詰ヲ以テ往返共之ヲ給シ滯在中ハ其日數ニ應シ滯留日當ヲ給スヘシ（十里以上ノ端里數一里ニ滿タサルハ切捨トス一里以上ハ旅費日當一日分ヲ給ス）
　但片道二里以上滿五里迄ノ地ヲ一日間ニ往來スルモ日當ハ一日分ノ外給セス尤二里未滿ノ地ヨリ呼出セシモノハ辨當料金二錢五厘ヲ給ス（九年第百七號布告ヲ以テ但書ヲ增補ス）
一各裁判所及ヒ警察官吏ヨリ呼出ヲ受テ無罪ニ歸スルモノ人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出タルモノ旅費ハ其呼出シタル廳ヨリ之ヲ給ス其他ハ總テ本管廳（寄留ノモノハ其寄留地

九年内務省乙第百廿七號達ヲ以テ警察官ノ處分ニ依リ支給セシ分ハ警察費ヨリ支辨セシム（第九十六ノ九項）

ノ管轄廳ヨリ給スルニ付証人及附添ヲ命スル者等ノ如キハ俸給中ノ日數并ニ往復里程ヲ詳記シ其裁判官ノ証印ヲ請ケ旅費請取方ヲ申請スヘシ九年第百三十二號布告ヲ以テ（各裁判所）ノ下割註ヲ除キ（及ヒ警察官吏）ノ六字ヲ加ヘ（其呼出タル）ノ下（裁判所）及割註ヲ刪除シ（廳）ヲ加ヘ又同年第百五十一號布告ヲ以テ（無罪ニ歸スルモノ）ノ下（入費）云々ノ二十四字ヲ加フ

○刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用支給方 明治十七年三月二十五日 内務省乙第十八號警視廳府縣（東京府ヲ除ク）ヘ達

刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用之儀曩ニ指令又ハ訓示及ヒ置キ候次第モ有之處豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲シタル場合ヲ除ク外ハ起訴ノ前後ニ拘ハラス裁判費用ニ相立タサル儀ニ付之ニ矛盾スル指令及ヒ訓示ハ都テ取消候條支給方ハ明治九年第六拾三號公布ニ據ル儀ト可心得此旨相達候事

現行日本類典 終

正誤

六丁十二行 正分○院局○ハ正院○分局○ノ誤
七十丁第五條端頭 增○滅○ハ消○滅○ノ誤
九十四丁初行 詔○可ハ許○可ノ誤
二百三十六丁六行 出○際ハ失○際ノ誤
三百五十三丁八、行 宣告○ハ宣布○ノ誤
三百五十六丁十一行 本文ハ○ハ本文ニ○ノ誤
四百十九丁七行割註 （十四年第三十號税布告ニ依リ証印ヲノ廢除ク）ハ（十四年第三十號布告ニ依リ証印税ノ廢ヲ除ク）ノ誤
四百五十七丁第五條端頭 看○參○ハ參○看○ノ誤
同丁三行 管○轄○ハ管○廳○ノ誤
四百九十六丁十五行 受○媛縣ハ愛○媛縣ノ誤
七百三十五丁二行 願○序ハ順○序ノ誤
同丁九行 侍○ツハ待○ツノ誤
七百六十一丁十五行 許○スハ免○スノ誤
七百八十五丁四行 志頭ノ下○兵○ヲ脱ス
九百四丁初行 分○ニ○ハ分ヲ○ノ誤
九百五十二丁十四行 認可料○ハ認許料○ノ誤

千一丁　十九行　後沒ハ後段ノ誤
千九十八丁二行七行十三行中　農商務省ハ工部省ノ誤
千二百七十四丁十八行　肯セサルハ肯セサルノ誤
千三百八丁　十六行　重ニキハ重キニノ誤
千三百二十丁　十五行　及モハ及ヒノ誤
千三百九十丁　十六行　遺体式葬ハ遺骸葬式ノ誤
千五百一丁十二行鼇頭　十七三條ハ七十三條ノ誤

明治十八年十一月七日版權免許

定價金三圓五拾錢

編纂人　東京府士族　市岡正一
府下四谷區永住町貳拾壹番地

出版人　兵庫縣士族　長尾景弼
府下芝區愛宕下町三丁目壹番地寄留

賣捌所
東京銀坐四丁目　博聞本社
大阪備後町四丁目　仝分社
千葉縣下千葉町　仝分社
埼玉縣下浦和驛　仝分社

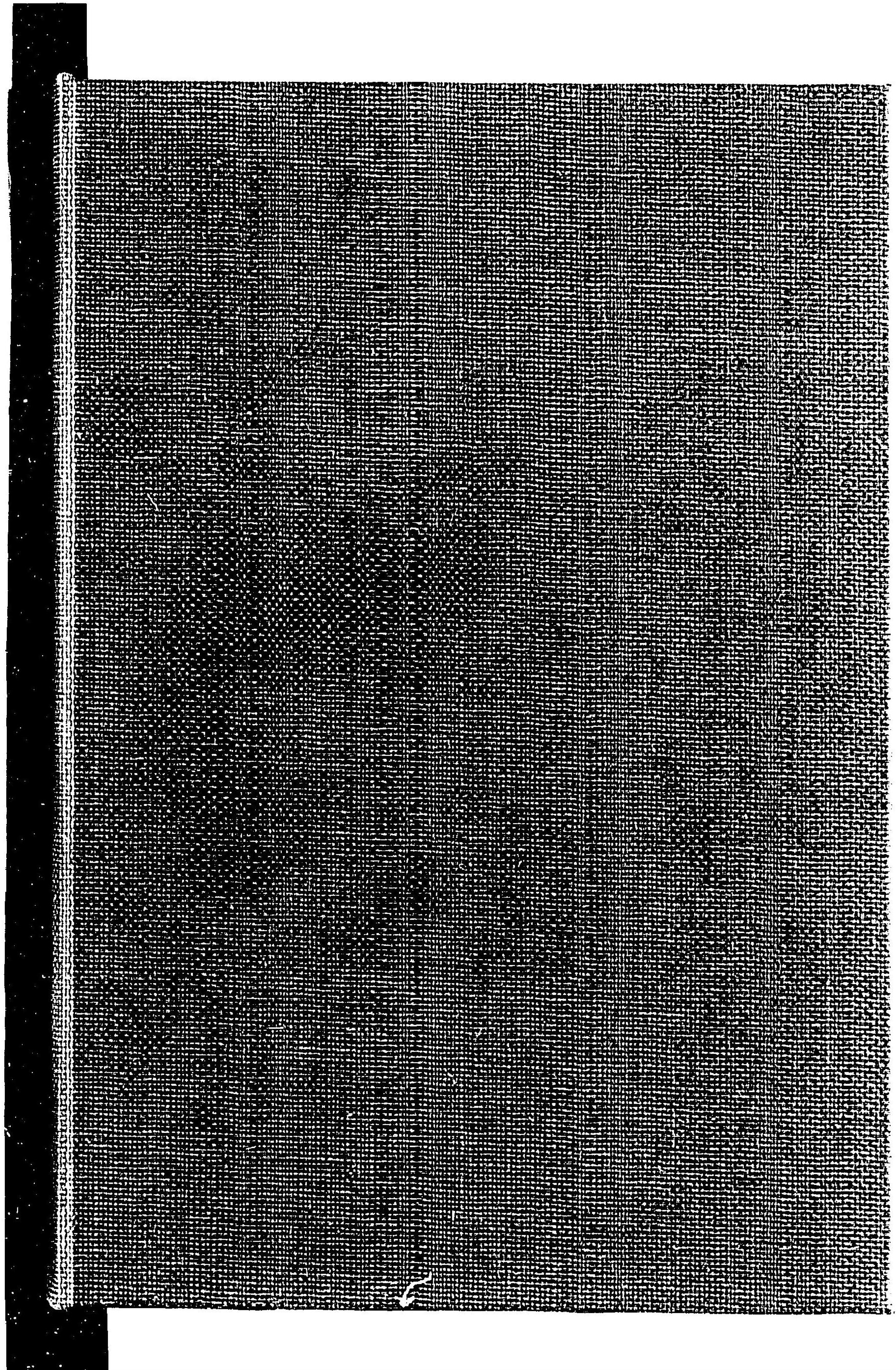
賣捌書林

東京日本橋通壹丁目
仝
仝　通二丁目
仝
仝　通三丁目
仝　西河岸町
仝　南傳馬町壹丁目
仝
仝　柴井町
仝　兩國吉川町
仝　本町二丁目
仝　横山町二丁目
仝　神田表神保町
仝　麴町三丁目
仝　芝日影町
仝　神田雉子町
西京東洞院三條上ル
仝　佛光寺通烏丸東ヘ入
仝　河原町通
大阪本町四丁目
仝　南久寶寺町
仝　北久太郎町
横濱辨天通四丁目
肥前長崎引地町
函館大町

北畠茂兵衛
大倉孫兵衛
小林新兵衛
山城屋佐兵
丸善書店
開成堂
須原鐵二
叢書閣
近江屋半七
松井忠兵衛
島屋一助
柳川梅次郎
岩屋彌兵衛
中西屋邦太
石塚德太郎
二三屋三二
巖々堂
村上勘兵衛
東枝吉兵衛
大黒屋太郎右衛門
岡島真七
前川善兵衛
柳原喜兵衛
丸善書店
鶴野常藏
常野嘉兵衛

越後新潟古町通二番町
駿州靜岡江川町
尾州名古屋本町
仝　本町
勢州津北堀端
江州彦根西内大工町
濃州岐阜太田町
紀州和歌山北町
越後長岡裏一ノ町
仝　高田呉服町
加州金澤尾張町
越前福井照手町
備前岡山仲ノ町
雲州松江本町
阿州德島
伊豫松山港町
仝　港町
肥後熊本新二丁目
筑前福岡橋口町
日向延岡新小路
陸中盛岡中ノ橋通
陸奥弘前土手町
陸前仙臺大町
野州宇都宮
常州土浦
仝　水戸上市泉町

井筒駒吉
廣瀬文林堂
片野東四郎
石版舍
若林堂
新々堂
森陽舍
津田源兵衛
大橋新太郎
本多勝太郎
牧野作平
岡崎左喜介
細謹社
圓山喜三右衛門
阪井萬吉
向井藏次郎
玉井新次郎
長崎次郎
山崎登
遠山貞一
澤田正介
野崎九兵衛
木村文助
小林八郎
柳旦堂本店
仝　支店



030933−001−7

CZ−5−015

現行日本類典

正編、２−４編

市岡　正一／編

M18−22

BBC−0272